
ハーレム目指して何が悪い

白告 介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーレム日指して何が悪い

【NNコード】

N1558Y

【作者名】

白告 介

【あらすじ】

柴田速人はその日もオンラインゲームをして寝た。次の日起きると異世界だった。

その世界で速人はどう生きていくのか？

チート、主人公最強物です。ハーレム日指します。

プロローグ（前書き）

初投稿です。よろしくお願ひいたします。

プロローグ

目の前に青白いエフェクトが飛び散った、ドラゴンが咆哮する。俺達は4人でパーティを組んで、このドラゴンに立ち向かっている。

まあ今の俺達には全然弱い敵だ、そんなに苦労しないだろうと思つ。本当にいつ見てもでかいな、と余計な事を考えながら奴から距離をとる。

「グアア ギヤーッ！」

この叫び声だけは何度聞いても慣れない、次の瞬間迫り来る炎、隣から巨大な盾を持った人が飛び出してくる。

「助かつた！ ありがとうマサ」

俺はマサに礼を言つて走り出す、ドラゴンの首元に近づくと血煙の双剣で切り付ける。

「グッ！」

直後に飛んできた尻尾に薙ぎ払われる。壁にすごい勢いで飛ばされる。なんて奴だ。俺は悪態をつきながら立ち上がる。

「ハヤト！ 大丈夫！ ？」

ハルカが回復呪文を掛けてくれる、体から痛みが引いていく。

後ろの方で呪文が唱えられてドラゴンに光が集まり、爆発する、サトルだ。

俺も双剣を持ち直して走り出す、ドラゴンの尻尾を避けつつ近づく、スキル『連續斬』を発動させる、右手に持った剣で頭を斬り付ける、次の瞬間には左の剣がくびを斬った、ドラゴンは苦しむがまだ倒れない、くそつ、しぶといやつめ。

「サトル！頼む！！マサ援護！！！」

俺は下がりながら叫ぶ、サトルが後ろで呪文を唱えている、ドラゴンがサトルに炎を吐く、がマサが出てきて盾で守る。

俺もタイミングを見計りつて走り出す。

サトルが呪文を完成させる。

「火炎地獄！」
ヘルフレイム

すぐにドラゴンが火に包まれる俺はそれを無視して火の中を走る、スキル『斬撃の嵐』を発動して目にも止まらぬ速さで切り付ける。

「ハーア　ア　ヤツ」

俺が切り終えるとドラゴンはゆっくりと倒れた。

画面にクエストクリアーの文字が広がった。

俺は、安堵して伸びをしながらパソコンの画面から目を離した。ふと壁に掛けている時計を見てみる。

「・・・2時15分か・・・フ、フワア・・・ねむつ」

欠伸をして画面を見ると他のパーティーのメンバーたちが別れの挨拶をしていた、俺も挨拶をしてパソコンを切る。

俺がしていたオンラインゲームは『FIGHT QUEST』というゲームでダンジョンなどをモンスターを倒しながら探索するのだ。なかなか凝ったゲーム内容としつかりしたサポートで人気がある。

俺は、このゲームにハマって学校から帰ると寝るまでやり続ける、別に俺に友達がないくて他にする事がないとかではない・・・・・本当だぜ・・・・・。

そんなしようもないことを考えながら明日の学校の準備をしてベットに入った。

第1話 異世界へ

「…………んっ…………んん」

なにやら寝心地が悪いと思いながら田を覚ますと外だつた…………

えっヒ、俺ちやんヒベシテで寝たよな？

…………混乱してきた…………まず、今の状況を把握しよつ。

まず俺の名前は柴田速人、年は17で高校二年だ。

昨日は、オンラインゲームでいつものメンバーとクエストをしてからベットで寝たはずだ。

遅かつたし疲れてたんだ。

何が起きたんだホントと思つて周りを見てみるとどうでも草しかない草原だつた。

こんな草原が日本にあるのか？もしかして海外か！！

よく見ると見たこともない草だ。

ふと自分を見ると布でできた服を着ていた。寝る時はジャージで寝たはずだが……んっこの服見たことあると思つていたら、昨日や

つていたオンラインゲームの初期装備にそつくりだ。

まさかゲームの世界に来たとか？

小説とかではよくある展開だが俺は遠慮したかつたな。

試しにステータスと念じてみた。

すると目の前に文字が浮かんできた。

シバタ ハヤト

Lv.1

人間

自由民

17歳

平民

体力 100

筋力 999

知力 001

耐力 100

俊敏

片手剣 100

双剣 100

ナイフ 10

隠密 100

魔法 ステータス確認

装備
布の服
皮の靴
鉄の剣

…………うんつ、出ちゃったよー！

俺が使っていたキャラとステータスはほぼ同じだし、レベルと装備は初期に戻ってるけど。

俺は攻撃力と素早さを上げまくってたから、ステータスが偏っている。

魔法は全く使えないし、防御力や体力も低い。

まあその分剣だけで大抵のモンスターは倒せるようになった。

どうせゲームの世界に来るのならば魔法使えるようにしておけばよかった。

憧れるよね魔法。

スキルは双剣と片手剣と隠密がMAXでナイフが少し・・・んつ、見覚えのないステータスがある『ステータス確認』なんだこれ？

名前から考えると今見てるやつかな。

さて、どうしよう・・・本当にゲームの中に来たのか？

他に人はいるのか？

モンスターもいるのか？

俺は強いのか？

いろいろ考えたが答えが出ない、とりあえず情報が必要だ。

人がいる所を探そう、・・・・・人が居ればな・・・。

俺はそう思つて歩き出した。

「誰もいねーーー！」

あれから3時間ぐらい歩いてやっと道に出た。

どっちに行つたらいいか分らんので適当に歩いていたが誰にも会わん。

「道があるから人はいるはずなんだけどな」

今のところモンスターにも会つてないし何か悲しい。

弱いモンスターで腕試しがしたかつたんだけどな。

俺はこのまま食え死にするんじゃないだろうか？

町はないのか、道があるからあるはずなんだが。

不安になつてきた。誰か出てこないかな。

そんなことを考へていると自然と少し急ぎ足になつていた。

「何だ！？」

突然どこかで大声がした。

第1話 異世界へ（後書き）

第1話でした。

これからはできれば2・3日に1回投稿したいです。

よろしくお願いします。

第2話 盗賊（前書き）

早く出来たので投稿します。

第2話 盗賊

「何だ！」

誰かが叫んだ。

んつ、俺か？

そう思つて周りを見てみると、誰も見当たらない。

声がした所に行くと人に会えるかなと思い走り出した。

少し行くと馬車が止まっていた。

馬車を取り囲んでいる盗賊らしき男たち。

10人はいるだろうか。

馬車の近くには鎧を着た人が倒れていて、そのそばに高そうな服を着たおっさんが震えていた。

「なんだ、オッサンかよ」

出来れば貴族の女の子を救つて、その女の子に好かれるなんて展開を期待してたのに。

残念だ。

とりあえず話し掛けみてよう、何かこの世界の情報が分るかもしけ

ないし。

もしかしたら、あのおっさんが悪いかもしね。

「すみませ～ん」

呼びかけてみると盜賊たちは振り返った。

一人が話しかけてきた。

「あつ！なんだてめえは」

うわっ、いきなり不機嫌そうだ。

「通りすがりの旅人です」

ちょっとおどけて行つてみた。

「調子乗つてんじゃねえぞ」

余計怒らせてしまった。

面倒臭いやつだな、とりあえず何していいのか聞いてみよつか。

「すみません、何してるんですか？」

「ゴッと笑顔も付けてやつた。

「何笑つてんだ気持ち悪いな。何してるって、そりゃ商人襲つて商品を頂こうとしてんだよ」

気持ち悪いって・・・、傷付くな。

やつぱりか、日本よりは治安が悪いみたいだ。

それはそつだらうな、みんな剣持つているし。

とりあえず何か聞いてみよう。

「あの〜、聞きたいことがあるんですが」

すると今まで話していた人の後ろからリーダーみたいな人が話し掛けってきた。

「おい、てめえ分かつてんのか？俺たちは今強盗してんだよ」

「もういいじゃないすか、どうせ顔見られたんだから殺すんでしょう？」

「ああ、やつちまえ」

まじかよ、結局何の情報も引きだせなかつた。

あのステータスだから負けることはないと思つねど。

この世界でも斬られたら死ぬんだろうな。

ゲームみたいに復活はしないだろ。

近くにいた人が切り掛かってきた。

俺は焦つて横に避けた。

うわっ、すごく速く動けるし相手が遅く感じる。これが俊敏999
か。

「何っ！」

男が驚いてる。

剣を抜くと思ったより重くなかった。

筋力も上がっているみたいだ。

隙だらけの男に切り掛かる。

意外と軽く切れた。

鮮血が飛び散る。

男の首が飛んだ。

「うわっ！」

思わず声が出た。

吐きそうになる。

最悪だ人を殺してしまった。

自分でやつといてなんだがえぐい。

「へめえよくもー。」

他の盗賊たちが来る。

迫る剣を避けて切り付ける。

また鮮血が飛び散る。

次に迫ってきた剣も避ける。

切りつける。

体が風のように軽い。

興奮してアドレナリンが回ってきた。

次々と避けては切り付ける。

全員殺すのにそんなに時間はかからなかつた。

俺は返り血で真っ赤に染まつていた。

俺は、人を殺してしまった。

戦闘の興奮が覚めると自分のしてしまったことが恐くなつた。

吐き気を必死に抑える。

相手は犯罪者だ。

殺さなければ俺が殺されていたんだ、ここは日本じゃないんだ。

そう自分を無理矢理納得させる。

そうしないと自分を見失いそうだった。

一人で呆然としていると不意に後ろから声が聞こえた。

第3話 奴隸商人（前書き）

調子がいいのでまた投稿。

第3話 奴隸商人

後ろからの声に振り返ると高級そうな服を着たオッサンがいた。

「あの、助けて頂いてありがとうございました」

「いや、別にいいよ」

いいから放つておいてくれ、俺は今、自口嫌悪中なんだよ。

「護衛の者もやられて危ういところでした。商品の奴隸も無事でしたし、どうお礼をしたらいいのか」

あの鎧の人は護衛だったのか。

商品も無事でよかった・・・・・・・って奴隸?

あー、そういうばゲームでも一人でプレイする人のために奴隸を買って一緒に戦うつてのがあったな。

何のためのMMOだつて思つて、俺はパーティー組んでたから忘れてた。

「ど、奴隸?」

思わず聞き返す。

「はい奴隸でござります、あなた様は見た所冒険者みたいですが、パーティーを組んでいるわけでもないみたいですし、奴隸を買われ

ないんですか？」

と言われても金がない。

「いつ堂々と奴隸と云つんだから、奴隸が普通に認められているんだ
わ！」

しかしこいつ普通に奴隸と聞くとなんだが嫌だな。

やはり現代人としては嫌悪感がするな。

「金があまり無いからな」

一応少なこじておぐ。

「それならその盗賊たちは賞金が掛けられていると思こますが
その賞金で買えると思こますが」

まじで、賞金があるのか。

「よろしければ町までお送りしますが、町で奴隸商をやつてあります
オスカーでござります。店にもぜひ来てください。命を助けて頂
いたのですし、安く致しますよ」

やつて笑うオスカーさん。

「やうが、なら頼もつ。やうこねば賞金を受けとるこにはやつしたら
いいんだ？」

「えつと、武器を持つて行けばいいんですが、知らなかつたのです

か

聞くと驚いた顔をしたが答えてくれた。

まことに怪しまれたか。

異世界から来たといつのはあまり知られたくないから、『まかそつ。

「こや、田舎から出でてきたばかりのもんで」

まづつたかな？

まつ、大丈夫だらう・・・そつ思つておひへ。

馬車で町まで送つて貰ひつゝとした。

「なあ、これから行く町はなんて町なんだ？」

「冒険者の町マスラです。近くにダンジョンがあつて、冒険者が多
いんです。アースファルト王国では一番田に大きい町です。」

んー、ゲーム内にはなかつた国や町だな、そこまでは一緒じやない
のかな。

「そついえば、さつきの盗賊たちに魔法使いがいなかつたけど、や
つぱり珍しいのか」

「ええ、魔法の才能がある人は少ないそつです。ハヤト様は魔法を

？」

「いや、俺は剣だけだ」

やつぱり珍しいのか。

そういえば日本語が通じている、異世界だからかな？

どうしてだろう？

まあ、便利だからいいや。

その後、オスカーさんと話して一年は365日で地球と同じだと分かった。

ほぼ地球と変わらんな。

黒髪黒目はいないことはないがそれなりに珍しいらしい。

それからもオスカーさんと雑談しながら町を回った。

第4話　冒険者ギルド（前書き）

今まで「1話」といって短すぎたので、少し長くしました。
更新速度は落ちるかもですが悪しからず。

第4話 冒険者ギルド

「うわ〜」

マスラは予想してたより大きかった。

周りは柵で囲まれて正面に立派な門がある。

マスラに入ると結構人がいた。

出店みたいなのがたくさんあって、店の人たちが口々に客引きしている。

冒険者らしき剣や斧を持った人、ロープをきたいかにも魔法使いだという人がいる。

驚いたことに耳が尖っているエルフと思われる人や、背が小さくやたら筋肉質なドワーフっぽい人までいた。

そんな異種族に感動していると、オスカーさんに話し掛けられた。

「どうしました？」

「いや、俺の故郷には異種族がいなかつたから」

「そりなんですか？」二度邊では普通ですよ

と笑っていた。

決して嘘ではない。俺の故郷、地球ではいなかつたからな。

十字路に差し掛かつた時オスカーさんがこっちを向いた。

「そここの角の建物が冒険者ギルドです。盗賊たちの賞金はそこで貰えます。ギルドの登録もしたほうがいいでしょう。向かいが宿屋、私のやつている奴隸商はここを右に曲がった先です」

「親切にありがとうございます」

「いえいえ、命を助けられたのですから当然です。奴隸が必要になつたら来て下さい。安くしますので」

「じゃあ」

そう言って盗賊たちの剣を入れた麻の袋を持って、オスカーさんと別れた。

麻の袋はオスカーサンに貰つた。

まず、冒険者ギルドに行つてギルドに登録して、賞金でも貰いますか。

冒険者ギルドは、レンガの立派な建物だつた。

中に入ると田の前にカウンターが3つあつた。

右手には依頼書だと思われる紙が貼つてある掲示板がある。

カウンターは左が空いていたからそこに行く。

「すみません、ギルドに登録したいんですけど」

カウンターの中にはメガネの若い女の人人がいた。

いかにも、出来る女という感じだ。

結構、美人だ。

「はい、登録ですね。この紙に名前を書いて下さい。名前以外は別に書かなくてもいいですよ。あと登録に10セール頂きますがよろしいですか？」

「ああ、大丈夫だ」

何故お金があるかというと、オスカーさんに貰つたからだ。

ギルドに登録してない言つとお礼にとくれた。

オスカーさんの話しからすると、1セールは大体100円ぐらいだと思う。

紙を見ると日本語だ。

俺がそう見えるだけかもしれないが便利でよかつた。

まずは名前、柴田 速人。

年齢、17。

種族、人間。

技能・・・。

「すみません技能つて何書いたらいいんですか？」

「使える武器や魔法などを書いて頂いたら依頼を紹介しやすくなり
ます。別に書かなくても問題ありませんよ」

そうか、どうしよう。

とりあえず、剣、双剣と書いておく。

出身地は書けないな。

こんなもんでいいか。

「書けました」

「はい、柴田速人様ですね、私は受付のミリアです。少々お待ち下
さい」

そういうて奥に入つて行つた。

周りを見てみると猫耳が生えている女人がいた。

獣人もいるのか！？

やつぱり猫耳は萌えるなあと思っていると//コアさんが帰ってきた。

「こちらがギルドカードになります、無くさないよう元にして下さい。
再発行には100セール掛かります」

「分かりました」

「では、ギルドについて説明しますね」

「お願いします」

「このギルドではランクがEからAさらにその上になります。
ランクは依頼にも書かれています、自分の一つ上のランクまでの
依頼しか受けられません。ランクを上げるには同ランクの依頼を10
回か、一つ上の依頼を5回か、二つ上の依頼を2回成功させれば上
がります。ただしAからSへはギルドで判断します。ここまでよろ
しいですか？」

「ランクによって変わるのは受けられる依頼だけですか？」

「いいえ、ランクが上がるごとに宿や他の店でも値引きして貰えま
す。ハヤト様はEからですから頑張って下さい」

まじか早くランク上げたくなってきた。

「おお、それは」

「次に依頼ですが討伐、採集、護衛、他にも様々な種類があります。
依頼は向こうにある掲示板で確認して紙をカウンターに持ってきて
頂ければ、依頼主に合わせる手はずになっています。依頼の報酬は
一割、ギルドが頂きます。失敗した時は罰金を頂きますので実力にあ
った依頼をうけて下さい」

ミリ亞さんは「」で言葉を切った。

「依頼は一度に一つしか受けれないんですか？」

「はい、一つしか受けられません。しかし討伐や採集などは、証明の部位がありましたら、後から依頼を受けて頂いてもいいですよ。また、依頼の掲示板の横には賞金首が張り出されています。この者たちを捕まえるか討ち取った時はこちらにきて頂いたら賞金を渡します。殺人などの犯罪を犯した際には、賞金首になってしまいますので注意して下さいね。ああ、もちろん賞金首や盗賊などは別です。」

焦つた、いきなり賞金首にされるかと思つた。

「また、パーティーを組んで頂くこともできます。その場合は一番下のランクの人の3つ上の依頼までが受けれます。パーティーは5人までです。奴隸もパーティーに含まれます、奴隸にランクがありませんので、主人のランクと同じになります。ハヤト様はパーティーを組んでいない様なので奴隸を買われるのですか？」

「んーやっぱり一人じゃ厳しいのかな？」

「そうですね、ランクが上がると厳しいでしょうね。パーティーを組むのも信用している人がいないと難しいですしね」

「そうですか、考えておきます」

やつぱり厳しいのか。

俺なら一人でもいけないことはないだろ？が、田立ち過ぎただろ？
な。

田立つのは避けたい。

「最後に、ギルドメンバーの揉め事には、ギルドはあまり関わりません
のでお願いします」

なんて無責任な。

まあ、そんなものなのかな、荒くれ者も多いだろ？、やっかいご
とが多いんだろ？。

「あつ、やういえばここに来る途中で盗賊に襲われている人を助け
て、その時に殺した盗賊の武器があるんですが、賞金つてもらえま
すか？」

「調べてみますので出して頂けますか？」

俺は袋から十本の武器を出した。

武器を調べるミコアさん。

「うー、これはー！」

びっくりした顔をしている。

何かまずい事でもあったのか？

「これは、今この町で暴れていた盗賊団ですー、ギルドでも行方を探

していたんですね、助かりました

身を乗り出して言つてくる。

か、顔が近い。

「そ、そつなんですか？」

「そうですよ、ありがとうございました。賞金は三万五千セールになります。」

セールとはこの世界の通貨だ。

三万五千セールって三五五十五万円！？

まじか、一気にこんな大金が入るとは。

「三万五千セールです」

言ひながら金貨三枚と銀貨五枚渡してきた。

金貨は銀貨10枚分から下には半銀貨、銅貨、半銅貨があるそれぞれ十枚で上に上がる。

「ありがとうございました、ミコアさん」

そう言つて受付から離れて依頼書でも見てみようと思ひ、掲示板に近づく。

「おー、お前」

いきなり田の前のチャラチャラした男に話しかけられた。

「えへと、何ですか」

「ギルドに入つたばかりで、盗賊団を倒したからつて調子に乗つて、ミコアさんと親しそうに話してんじゃねえぞ」

うわつ面倒臭ー。どこでもいつこつ弱こくせんと壇をひくやつてこるよな。

「てめえー！舐めてんのか？」

「えつ、声に出てた？」

まづつた。

俺たちの声が周りの注目を集めると。

男は周りを見て舌打ちをする。

「くわつー。覚えてるよ。せめて夜道には注意することだな」

捨てゼリフを吐いて出て行つた。

さすがにギルドの中では暴れなかつたよつだ。

よかつた、揉め事は勘弁だからな。

田立つてしまつたよ。

俺も人目から逃げるようにギルドを出た。

第5話 宿屋

ギルドを出るとまだ日が高かったから、町をぶらついていた。

まず、武器を買つために武器屋に行く。

武器屋は、いかにも職人の工房みたいな所に、武器が並べてあった。

中に入るとドワーフのオッサンがいた。

「いらっしゃい」

「すみません、双剣つてありますか?」

「おひへ、あるぜ」

そういって指差した先には、綺麗な双剣が置いてあった。

「それは、ミスリルの剣だ」

ミスリルか!

まあ、最初の武器にしては上等だね。

「オッサン、これいくら?」

「一千セールが一本で四千セールだ」

「よし、買つた」

銀貨を四枚はらつ。

オッサンは、剣を鞘に入れて渡してくれた。

ついでに、今まで持つていた鉄の剣を渡す。

店から出て、防具を貰おうと思つていたけど、重いのが嫌なので止めておく。

この装備のままでいるのも嫌だったから、服屋に入った。

服屋では、黒のズボンとインナー、それから黒の外套と全身黒の格好にした。

剣は左右に一本ずつ引っ提げた。

目立たない様に黒にしたけど、黒づくめに左右の剣は目立つ気がするには気のせいだ。

服は全部で五百セールだった。

以外と高い・・・。

その後もぶらぶらしていると、細い道に入った。

戻るのは嫌なので進んでいると、前に何やら揉めている5、6人の人たち。

「うわ、最悪」

嫌だつたが気になるので近づく。

獣人の女の子が5人の若者に囲まれていた。

「何してるんだ？」

とりあえず聞く。

「うるさいな！俺は今いらついているんだ！ギルドで気に喰わないガキと言い合いをして、むしゃくしゃしている所にこの獣人のガキがぶつかってきたのに謝らねえんだ。獣人の癖に生意気な奴だ」

よくしゃべるな。

やつぱり獣人って差別とかあるのか？

このキャララキャラした男いらつくな・・・・・・この男見たことあるな。

あつ、ギルドで絡んできたやつだ。

つて気に喰わないガキって俺のことか。

「ねえ、俺のこと覚えてない？」

「あつ！」

俺の顔をジロッと見てくる。

「てめえ、ギルドでは恥かかせてくれたな」

「いや、自滅でしょ」

「黙れーもういいお前らやつちまえ」

4人が殴り掛かつてくる。

剣はまざいと思って、素手で対応する。

ステータスのおかげで力は増している。

「ぐはつ」

「ゴバツ」

「へぶらりつ」

「がつ」

すぐに4人には地面とキスしてもらい。

「こんな事一度とすんじゃねえぞ」

言いながらチャラチャラした奴も殴る。

獣人の女の子は驚いた顔をしていた。

俺より少し年下みたいで、猫耳としっぽがついていた。

「あ、あつがとつ」やこました。あたしはスン。冒険者になつたばかりなの」

「おひ、こいつて。俺はハヤト。俺も冒険者になつたばかりだ」

猫耳に感動していたから焦る。

「本当にありがとうございます。この恩は必ず返すから」

そう言って走り去りとした。

「ちよっと待って」

俺は呼び止めた。

「何?」

こいつを警戒しているが気付かず用件を囁く。

「恩はここで返してくれないか?」

「い、いりでー何をなすの?」

涙目で見てくる。

かわいい、思わず抱きしめたくなつた。

「何を勘違いしているか分からぬけど、俺は道に迷つているんだ。ギルドの所まで案内してくれないか」

「そ、そんなことなり早へ言つてよね」

スンは顔を真っ赤にして言った。

訳が分からん。

スンに案内して貰つて無事ギルドまで戻つて来れた。

「ありがと、スン」

「あたしの方」をありがと

恥ずかしそうに黙つと走り去つて行つた。

もつ口が暮れかけてくる。

今日はもつ宿屋に泊まつと思つて、ギルドの向かいにある宿屋に入つた。

「こりつしゃいませ」

宿に入ると、おれと同じ年ぐらいの女の子がカウンターの中にいた。

短めの茶髪で目がクリクリしていてかわいい。

「えへと、部屋は空いてますか？」

ちゅうじでキドキしながら話し掛けた。

やつぱり、かわいい娘はいいな。

「はい、空いてますよ。お一人様ですか？」

「はい、そうです。一泊いくらですか？」

「30セールです。ご飯は20セールで付けることができます」

「じゃあ、ご飯付きで。とりあえず、10日分」

銀貨を一枚渡す。

「はい、ありがとうございます。お釣りの50セールになります」

半銀貨5枚を受け取る。

「私は、二ーナです。両親がこの宿をやっているので、手伝っているんです」

やつぱり娘か。

「これで店の主人とか言われたら、驚きの若さだ。

「えへっと、俺はハヤトです。一応冒険者をしています」

「冒険者ですか、怪我の無い様にして下さいね

」コツと笑い掛けてくる。

か、かわいい。

「どうかしましたか？」

「い、いえ何でもあります」

見とれてこると話しかけてあせる。

「どうですか、では、部屋に案内しますね」

「お願ひします」

一ーナさんは、カウンターから出でると、階段を上って行く。

俺は急いで追いかけた。

「わあ、いい部屋ですね」

部屋は、そんなに広くないが、綺麗にまとまつていていい感じだ。

「夜」飯は田が暮れてから、朝は田が昇つてから食堂に来て頂ければ食べれます。お風呂は、1階にあるので「田田」というや

おお、風呂があるのか。

勝手な想像で無いかと思っていた。

「分かりました」

「では、」ゆきへつ

「一ーナをさせ出で行つた。

「まだ、口が出でこぬし、先に風呂入つていらぬか」

「あ～、気持ちよかつた」

風呂から出で来ると、もう口が暮れていった。

晩飯を食こて食堂に回へ。

途中で見知りぬおばなさんと話しお掛けられた。

「あんた、新しいお婆さんだつてね。一ーナから聞いたよ。あたしは一ーナの母親のシミルだよ」

一ーナのお母さんか。

イヤイヤ似てない。

「よろしくお願ひします。食堂つて何いひですか?..」

「ああ、やうだよ。食事を作つてこるのは夫のバールだよ。味は保証するよ」

「それは楽しみだな」

「もしも一ーナとは仲良くなつてくれないかい?すうといの宿で

働いてるから、同年代の友達がいないんだよ

「えっ！もちろんいいですよ」

「じゃあよろしくね」

そう言つなり去つて行つた。

嵐の様な人だつた。

食堂に着くと他にも何人か客がいた。

一人の客は他にいなかつた。

みんなパーティを組んでいるか、奴隸を連れたりしているのかな。

一人なのでカウンターに座る。

ウェイトレスがよつてきて、注文を聞いてくる。

料理名なんて分からなかつたから、オススメを聞いてみてそのままたのんだ。

運ばれてきた料理は、パンっぽいのと、何かの肉を炒めたものにスープだつた。

シミルさんが言つてただけあつて味は美味しかつた。

「うわーうわー」

美味しかった。

どんな料理が来るかビクビクしていたから満足だ。

食堂を後にして部屋に戻った。

「今日は疲れたな」

一人でつぶやくとベッドに寝転んだ。

今日はいろいろあつたな。

元の世界で心配させているだらうか？・・・まあ友達はいなかつたからあまり悲しまれていらないだらう。

なんだか目から水が・・・。

親には悪いことしたな。

まあ、この世界でも生きていけそうだし心配すんな。

何たつて俺は、チートだし。

無双とか出来るだらう。

もつ、開き直つて女の子たちを侍りして、ハーレムでも作りたいな。

地球では女の子と縁がなかつたからな。

これは元の世界に未練が無いかも。

よし、目指せハーレム！！

そんな事を考えながら眠つた。

第6話 ハルフ

朝起きると知らない天井だつた。

「さうか、異世界に来たんだ」

昨日考えた結果、一人は目立つし何があるか分からないと思つた俺は、奴隸を買おうかと思っている。

出来れば魔法が使えるとうれしい。

それに俺はこの世界の常識に疎いから、そこいら辺も聞きたいし。

「よし、今日は奴隸商に行こう。」

何だか独り言が多くなってきた気がする。

早く話し相手が欲しい。

食堂でご飯を食べて、宿を出る。

町は朝から活氣があつた。

奴隸商に着く、建物は意外と綺麗で大きいかつた。

中に入つて受付に話し掛ける。

「すみません、ハヤトと言つ者ですけど、オスカーさんは居ますか」

「少々、お待ち下さい」

奥に入つて行くと、少しして戻ってきた。

「ハヤト様でござります」

つられて、応接間に案内された。

少しすると、相変わらず高そうな服を着たオスカーさんが現れた。

奴隸商つてのは儲けるみたいだ。

「ハヤト様、今日は来て頂いてありがとうございます」

「ああ、オスカーさんのおかげで、ギルドに登録出来たし、賞金を入れる事もできた」

「今日は、どのような用件で？」

「奴隸を探しに来た」

「どの様な奴隸ですか？」

「その前に聞いておきたいんだが、奴隸は、どんなやつがなるのか？」

「奴隸は犯罪者か身売りなどですね」

「犯罪者は危険が無いのか？」

「大丈夫ですよ、主人の命令を聞く魔道具を付けていますので、犯罪行為をさせる以外の命令には逆らえません」

魔道具か、魔法があるから当然か、自分が買った奴隸に殺されたくないからな。

「出来れば魔法を使える、女の子はいるか」

やつぱりかわいい女の子の主人になりたいでしょ。

しかも命令を聞くって言っている。

男の夢だな。

「魔法を使える女の子ですか？ん~、あつそついえ、エルフの若いのが居ました。女の子と言えるかは微妙ですが」

「まじですか！！」

エルフか、エルフなら美人のはずだ。

本当にいるとは。

「でも、エルフは値が張りますよ」

高いのか、相場がどれくらいか分からぬから分からん。

三万セールまでならいける。

「とは言つても、命の恩人ですしあのエルフは少々口が悪いので、

少し安くしますナビ。一回連れて来させますので少し待っていて下さい」

そう言って、出て行った。

エルフか、楽しみだな。

思わず笑みがでる。

「これは・・・」

思わず声が出た。

銀髪でつり目がちな緑眼のエルフが入ってきた。

ものすごく美人だ。

背は俺と同じぐらいで、細い。

何と言つてもスタイルがいい。

あの胸に顔を埋めたい。

「いかがですか。なかなかでしょう。ちなみに処女ですよ」

見とれているとオスカーさんが話し掛けてきた。

し、処女！

奴隸の価値に関わってくるんだろう。

唾を飲み込む。

是非とも欲しい。

「い、いくら何ですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「ハヤト様には恩もありますし、一万セールでビリビリじょっ
買います！」

即決した。

そう言いながら金貨一枚を渡す。

「ありがとうございます。では契約をしますから立って下さい」

すると近くにエルフが来た。

右手に着けている腕輪に手を持って行く。

オスカーさんが呪文を唱えると、腕輪が光った。

「これで、ハヤト様が主人になります」

びっくりしているとオスカーさんが話し掛けて来る。

「奴隸を解放したい時は出来ます。また、奴隸には住む所と必要な食事を『える義務があります』

そう言って、解放の呪文を教えてくれた。

「えっと、俺はハヤト。これからよろしく」

「…………」

反応がない。

「えへ、君の名前は？」

「……それは命令ですか？」

「いや命令じゃないけど、教えて欲しいなと」

キリがないと思つたのか、不機嫌そうに答える。

「私はミルシアです」

それっきり黙ってしまった。

先が思いやられる。

俺は、オスカーさんに挨拶して、ミルシアを連れて外に出た。

とりあえずミルシアの装備を整えようと思つた。

「ミルシアって、魔法を使えるんだよね？」

「はい」

「何か武器ついて要るの?」

「ナイフ」

「防具は何か着けるの?」

「要りない」

「じゃあ、服は要るよね」

「要る」

「会話が弾まない!」

とつあえずナイフを買つた。

五十セールの安いのを買つた。

多分護身用だね。

ずっと魔法を使う訳にもいかないからな。

服屋ではフード付きのローブを買つた。

他にも下着や普段着を買つた。

百五十セールになつた。

一通り装備を整えたし、ギルドに登録しに行こう。

「ミルシア、ギルドに登録しに行くよ

「はい」

さつきからミルシアは、はい、か、いいえ、しか言わなくなつた。

悲しい、やっぱり奴隸として買われたから、嫌われるのかな。

ギルドに入ると周りから注目された。

俺が美人のエルフといふからだろう。

受付には昨日のココアさんがいた。

「すみません、この子を登録したいんですけど」

「はい、この用紙に記入して下さい」

俺が登録料の十セールを払つてゐる間に、記入し終わつていた。

名前だけで他は空欄だ。

まあいいか。

問題はないし。

「ミルシアさんですね。ギルドの説明はこりますか?」

「いいえ、俺が説明しどきますから大丈夫です。ミルシア行くぞ」

そう言つてギルドを出る。

向かいの宿屋に入ると、シミルさんがいた。

「すみません、一人部屋に変えてほしいんですか？」

「おや、奴隸でも買つたのかい？ 料金は二のまま代っこよ。」

「ホントですか？ ありがとうございます」

シミルさんに一人部屋に案内してもらつと、一人部屋と大きさはあまり変わらない部屋に、ベッドが一つ置いてあつた。

「では、じゅうくつ。食事はもう大丈夫ですよ」

「じゃあ、今から食事にします」

俺はミルシアをつれて食堂に行つた。

食べ終わつて、風呂にも入つて部屋に戻ると、ミルシアはもう出でいた。

俺はミルシアにギルドの説明をした。

それが終わると、することがなくなつた。

「あ～、もう寝るか？」

いつも自分で自分のベッドに入つて寝よつとしていると、後ろから話しかけられた。

「何もしないの・・・?」

「えつ

驚いた、俺の気持ちを読まれたかと思った。

「そりゃ、したいけど。ミルシアが嫌そりだつたから

「なんで?」

「えつ

よく聞こえなかつた。

するとミルシアはベッドに入つて行つた。

まあいいか。

俺も夢の世界に旅立つた。

第7話 依頼（前書き）

この間にか、アクセスPV25000、ユニーク数5000、お
気に入り登録200を超えていました。

日間ランキングにもランクインしていく驚きました。

みなさんお読みいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第7話 依頼

「『』、人『』

ん~何か聞こえるな。

「『』主人様、『』主人様」

『』主人様? 誰だこんなかわいい声に『』主人様などと呼ばれている、うらやましいやつは。

「『』主人様! 『』主人様!!!」

はつ! 近くで殺気が。

身の危険を感じて飛び起きると、近くにミルシアがいた。

あの殺氣はミルシアからなのか?

「とりあえず聞きたいことがある」

「何でしょう、『』主人」

俺が言うと、ミルシアは表情を変えずに答えた。

『』主人様? 聞き間違いじゃないよな。

さつきから何回も聞こえてたからな。

「あ～、まずそのご主人様つてのは何だ?」

「い」主人様が私を買ったので当然です」

ご主人様、ご主人様つてなんか変な感じになるな。

「そのご主人様つてのは止めてくれないか?」

「それはご主人様の命令でも無理ですね」

何故か反抗的になつていて。

こんな感じだつたかな?

「そ、そつか。それから、さつきの殺氣は何だつたんだ?」

さつきの殺氣なんつて。

「何でもありません。それから面白くない事を考へないで下さい」

無表情で答えるミルシア。

怖!心を読まれた。

「心を読んだりしません」

やつぱり読んでるじやん。

買つ奴隸間違えたかも。

顔で即決するんじゃなかつた。

「朝食の時間ですよ」

ミルシアがメイドみたいになつていた。

朝食を食べると、ギルドで依頼を受けようと思つてギルドに向かつた。

ミルシアの実力を見たいし、金も稼がないとダメだからな。

ギルドに着くと俺たちは、目立つた。

全身黒ずくめの俺に、ローブを着た美人のエルフのミルシアだからな。

視線が痛い。

主に俺への嫉妬の視線が。

男の嫉妬は醜いぞ。

視線を無視して、掲示板に行く。

ランクFからDの依頼書を見てみると、掃除とか、荷物持ちなどの、簡単な依頼が多かつた。

Dにはじか討伐系の依頼があった。

魔物の名前はよく分からなかつたので、ミルシアに聞いてみる。

「なあミルシア、討伐系の依頼でどれがいいと思ひへ.

「討伐系ですか？ならこれが初心者が最初に受けれるのにいと思ひます」

と言つて、一枚の依頼書を指差した。

その紙を見ると、ゴブリンの討伐と書かれていた。

数は十匹、報酬は100セールか。

まあ、どんなのかやつてみよつ。

受付に持つて行くといつもニアさんがいた。

「これお願ひします」

「はー、ゴブリン10匹の討伐ですね」

話し掛けると笑顔で答えてくれた。

やつぱり笑顔だよな。

隣のミルシアに睨まれた。

怖いな。

「はい、そうです」

「では、ゴブリンはこの町の裏にある森にいます。倒した証拠にゴブリンの耳を持って来て下さい」

耳か、えぐいな。

「分かりました、ミルシア行こう!」

「分かりました、ご主人様」

周りから殺気が集まる。

ご主人様つての止めてくれないと、俺の命に関わる。

町を出て裏に回るとすぐに薄気味悪い森が広がっていた。

「なあミルシア、ゴブリンってどんなやつなんだ?」

森の中を歩きながら聞く。

「えつ、ご主人様は、ゴブリンを知らないのですか?」

残念ながら知らないんだよな。

多分俺がやつてたオンラインゲームに出てくるやつだらうが、詳し

くは分からぬ。

「ああ、その事は後で詳しく話すから」

「分かりました。ゴブリンは小さい|足歩行でこんな棒を持っている、醜いやつです」

ん~、分かりにくいやが想像のやつと同じだ。

「分かった」

少し森の奥に行くと、ゴブリンが10匹出て来た。

「ミルシア、魔法を使つてみて」

ミルシアの実力を知るために魔法を使わせる。

「分かりました」

そう言つて、集中するミルシア、綺麗だ。

思わず見とれていると、突然声がした。

「ウイングスラッシュ
風の斬撃」

見えない風が、ゴブリンに向かつて飛んでいく。

風によつて、ゴブリンを切り裂かれる。

「おお、やるじやん」

俺は、残ったゴブリンに向かつて走る。

双剣を自分で使うのは初めてだ。

2本の剣を抜く。

近づき流れる様に次々切り裂いていく。

「はあ、すげえ」

自分で自分のしたことに驚いた。

「『』主人様は、強いですね」

ミルシアが驚いていた。

自分でも驚いていた。

ミルシアもなかなか強いみたいだし、もっと強い魔物もいけそうだ
な。

とりあえず、ゴブリンの耳をぞぞ落とし袋に詰め込んでいく。

気持ち悪いな、これもやっていけばなるのかな。

町に戻ると、ギルドに向かう。

ギルドに入ると、コトアさんにパソコンの耳に渡した。

「はい、たしかに受け取りました。こちらが報酬の一〇〇セールになります」

ロランクの依頼だったから、後一回で次のランクに上がれるな。

明日にでも、依頼を受けよう。

「じゃあ、また明日きます」

ギルドを出て、宿屋に戻る。

「お帰りなさい、『』飯はどうしますか？」

一ーナが話しかけてきた。

「ただいま。『』飯は今からもらいます」

思わず一ーナの笑顔に笑う。

「『』主人様、気持ち悪いですよ」

何だよいいじゃないか、この無邪気な笑顔がいいんだよ。

その後、飯を食べて、部屋に戻った。

第7話 依頼（後書き）

「意見、感想などがありましたらどうぞお寄せ下さい。」

励みになります。

第8話 情報（前書き）

アクセスPV1000000、ユニーク20000突破しました！――！

日間ランキング6位、週間ランキングにも入ってました！――！

お気に入り登録数も1000件超えました！

みなさん読んでいただきありがとうございます。

第8話 情報

部屋に戻ると、俺はベッドに座った。

ミルシアは、側で立っている。

「座つたら？」

俺が勧めるけどミルシアは首を振る。

しょりがないからそのまま話を切り出す。

「えへと、俺の事だけど、ぶっちゃけると、俺は異世界つまりこの世界じゃない所から来たんだ。だからこの世界の事はほとんど知らない。だから色々教えて欲しいんだ」

「・・・それは、本当ですか？」

ミルシアは、怪訝そうに聞いてきた。

それはそうだ。俺もいきなり異世界とか言われたら怪しいと思つ。

「まあ、これが現実なんだな。俺も信じたくないんだけど」

そうつ言いて自嘲するよひに笑つ。

「理解は出来ません」

「つまり無理だよな。」

「でも、『主人様の言つ事を信じることは出来ます』

本當か？

「本當に信じてくれるのか？」

驚いて聞く。

「はい、信じます。この世界の事を教えたらいんですよね？」

「ああ、それに俺が分からぬ事で、変な事をしないように注意してくれ」

「分かりました。何も知らない『主人様』が下手な事をして恥を搔かない様に注意します」

「そ、そうだが」

何も知らない訳じやないんだけどな。

その後寝るまでこの世界の事を聞いた。

この世界はマルノーゼと言つて、大きな大陸と小さな島々がある。

大陸には、大きな国が4つと小国がいくつかある。

俺がいる国は、大陸の国の一つのアースファルト王国と言つて、王

政をしいていて、貴族もいる。

最大の領土を持つていて、この世界の中心だ。

他には、宗教の国、神聖ミルバル国。

この国は、魔法が盛んな国で内部の事がほとんど分からぬ、秘密主義の国。

農業の国イルファ。

この国は人口が多く、民主主義の国。

平和を求めて軍隊を持たない国だ。

魔物退治は冒険者に任せているようだ。

エストーラルは工業が盛んな国。

ドワーフなどの異種族が多く住んでいる。

この4つの国と他の小国が大陸にひしめいている。

この世界では今、戦争は起きてない。

最近増えてきた魔物の対応で精一杯のようだ。

魔物は、何らかの魔力によつて生きている生き物のことを言つ。

魔物は知能が高いものは少なく、ほとんどの魔物が人を見たら襲つてくる。

中には、人の言葉を理解して人と共存している魔物も少ないがいる。

魔物以外にも馬のような普通の動物もいる。

これは、魔力を持つていないので、地球の動物とほとんど変わらない。

魔法は魔力量と魔力を魔法に変換する能力が必要なため、使える人は少ない。

魔法を使うには、まず周りの魔力を自分の中に取り込み、その魔力を利用して、魔法を使用する。

魔法には、呪文を唱えたり、魔法陣を使う等の方法があるのだが、慣れてくると単語で魔法を使える様になる。

ミルシアは短い単語で使っていたから、それなりに強い魔法使いなんだろう。

魔法には、基本属性の火、水、風、土、電の五つに、それぞれの強化属性の炎、氷、嵐、地、雷があり、他に光、闇、移動、空間、回復がある。

ミルシアは、水、風、土、氷、嵐、移動を使えるみたいだ。

俺は、魔力量が多いみたいだから魔法を使う事も出来るみたいだ。

多分ステータスを上げると使えるようになるんだろう。

俺は剣を極めるつもりだから魔法を使う予定はないけどな。

ステータスが何なのか気になつてミルシアに聞いてみたけど、何の事か分からぬようだつた。

この世界にステータスの概念は無いようだ。

それが何で俺についているのか分からないけど、異世界からの召喚者だからだと思つておこひ。

ステータスが無かつたらこの世界で生きていけないからな。

この世界には、異種族がいる。

エルフや、ドワーフ、獣人などである。

エルフは、長い耳が特徴で、美男美女が多い。

1000年程生きるエルフもいる。

エルフは多くが森の中に集落を作つて、他種族との関わりを断つて生活している。

ドワーフは小柄で筋肉質、寿命は500年ぐらいだ。

ドワーフは鍛冶をしている者が多い。

獣人は、動物の耳やしつぽが特徴で、身体能力や五感が鋭かつたりする。

獣人は能力を生かして冒険者になる者が多い。

異種族に対しても、人間たちから差別があつたりする。

お金は、世界統一でセール。

やつぱり1セール100円ぐらいのようだ。

半銅貨が1セール、銅貨が10セール、半銀貨が100セール、銀貨が1000セール、金貨が10000セールだ。

俺が今持っている9900セールあれば当分は十分に生活できる額だ。

これがミルシアに教えてもらつた、この世界の情報だ。

ミルシアは、話し終えるとすぐに寝てしまった。

俺は、ミルシアからの情報を頭でまとめていると遅くなつた。

寝よつと思ひベッドに向かうと、隣のミルシアが田に入る。

無用心にきれいな顔をさらして寝てる。

つい、襲いそうになつた。

昨日あんな事を言つたからには、手を出せない。

俺は悶々と朝まで過いじした。

第9話 異常

「『主人様、起きて下さい』」

ミルシアに起^レされる。

「・・・ああ、おはよう」

昨日は悶々としてあんまり眠れなかつたから眠い。

そつも言つてられないから、今日も朝食を食べてギルドに向かう。

ギルドに入るとまた嫉妬の視線が集まる。

視線をスルーして掲示板に向かう。

ギルドのランクを早く上げたいからまたロランクの依頼を受けたいな。

「今日もロランクの依頼を受けたいんだけど、ミルシアはどれがいいと思つ?」

「そつですね、これなんかどうでしょ?」

そつとつて指差す依頼書には、『シャドウウルフの群れ討伐』とあつた。

報酬は1匹につき10セールで、場所は昨日と同じ町の裏の森の奥みたいだ。

「シャドウウルフの群れってどのくらいの数なの？」

ミルシアに聞いてみる。

「2、30匹が普通かと思います」

「それなら結構儲かるな・・・って2人でするには数多くない！？」

2人で2、30匹が多いだろ？

「『1』主人様なら大丈夫です！！」

「何にこやかに言つてんの、俺に丸投げか！？」

「・・・・」

「はあ～、ミルシアも手伝えよ」

まあ、Dランクだし大丈夫だろ？

依頼書を持って受付に行く。

いつもの様にミリアさんのお所に行く。

すでにミリアさんが担当みたいになつてている。

「この依頼を頼みます！」

依頼書を見ると、ミリアさんは驚いた顔で俺達の事を見てきた。

「おふたりで大丈夫なんですか？」

「やつぱりもつと大人用じゃないのか！？」

「いやー、多分大丈夫だと思います」

「大丈夫です。」主人様なりこの程度一瞬です

ミルシアが自信満々に言つてくれた。

ミリアさんも苦笑いじゃないか。

「・・・と、とりあえず大丈夫だからお願ひします」

「分かりました、シャドウルフの証拠は牙です。気をつけて行ってきて下さい」

ミルシアを連れてミリアさんから逃げる様にギルドから出た。

森に向かいながらミルシアにシャドウルフの説明を受ける。

「シャドウルフは人間の腰ぐらいの小柄で黒い毛並みです。知能は以外と高く群を作り、連携して獲物を囮んで狩ります」

「連携するのか厄介だな。なるべく囮まれない様にしないとな」

「『主人様、私を守つて下さいね？』

「自分で戦わないつもり！？」

「もちろん魔法を使って援護はします」

「頼むよ！ミルシア！群れだつたら魔法の方が効果的なんだからな

「・・・』主人様の剣の腕なら問題ないと私はいますが

「そうかもしれないが援護は頼んだぞ！」

「分かっています」

森に着いて奥に向かっていると、いきなり前からゴブリンが出てきた。

「ミルシア！」

ミルシアに呼びかける。

「頼みます」

頼まれた。

1匹だったので右手で剣を抜きながら近づき、剣をふる。

「ゴブリンは反応出来ずに血を出して倒れる。

「なあ、ゴブリンって集団行動するんじゃなかつたっけ？」

基本的に弱い魔物は集団で行動する。

「そのはずなんですが、周囲には居ないです。おかしいですね」

「匹だけはぐれたのかな？」

「まあ、考へても仕方がないから行こうぜー！」

そう言つて歩き出す。

「ミルシアー、シャドウワルフの居場所はまだなの？」

少し歩いていると暇になつた。

まだ着かないのか。

「まだまだですー。せつきから向をキョロキョロしてんですか？」

「だつて暇なんだよー！」

その時、前方から何かが走つて来る音がした。

複数だ！

「なんだ！？」

驚いていると前の茂みから黒い塊が飛んできた。

「まだじゃなかつたのか！」

俺は後ろに避けながら叫ぶ。

「ミルシアー！援護頼む！」

「了解です」

冷静な声に安心して田の前のシャドウワルフに剣を抜きざまに切る。

前から20匹ぐらい迫ってきて来る。

「ウォーターボール
水砲！」

後ろでミルシアの声が聞こえた。

水の塊が飛んでいて、何匹かのシャドウワルフに当たる。

当たった奴らは飛んでいく。

以外と威力があるみたいだ。

俺も走りだす。

田にも止まらない速さで進む。

近くにいたやつに右手の剣を振り下ろす、そのまま回転して左手の剣で周りを薙ぐ。

「おーひーー！」

2、3匹が血を出して崩れ落ちる。

「ウイングスラッシュ
風の斬撃！」

ミルシアが言つと空気を切り裂く様な風を感じる。

また数匹が血を出して倒れる。

残つた6匹が俺を囲む。

俺はまづいと思つて前にいる奴に向かつ。

他の奴らが俺に向かつて来るが無視する。

前の奴に近づいて顔面に剣を走らせる。

返す力で後ろに飛び掛かってくるのを叩き落とす。

残りの4匹も流れる様に切る。

「流石ですご主人様」

シャドウルフを全て倒すとミルシアが言つてきた。

「ミルシアの援護も助かったよー！」

「このくらい当然です」

少し嬉しそうに言う。

俺は調べたい事があつたからミルシアに証拠を集めてきて貰う。

ミルシアが離れると、俺は「ステータス」と念じる。

もう敵を結構倒しているからレベルが上がっているんじゃないかと思つたんだ。

シバタ ハヤト

Lv.5

人間

自由民

17歳

平民

体力 100

筋力 999

知力 001

耐力 100

俊敏 999

器用 800

振り分けポイント

60

スキル

片手剣 100

双剣 100

ナイフ 10

隠密 100

ステータス確認

魔法

装備

黒い外套

ミスリルの剣

ミスリルの剣

皮の靴

レベルが5になっていた。

振り分けポイントの60はステータスに振り分けられるんだろう。

何に振り分けようかな。

やつぱり、死にたくないから体力とか耐力に振り分けよう。

どうやって振り分けるんだ？

30ずつ体力と耐力に振り分けるように念じる。

出来た！

体力と耐力は今まで全然上げてなかつたからこれから上げよう。

ステータスを見ていると、ミルシアが戻ってきた。

「『主人様どうしました？』

「いや、何もない、そういうえばシャドウウルフってこんな近くに出るの？」

「もつと奥に居るはずなんですが、何故かは分かりません」

「分からぬいか。まあ、考へても仕方がないから帰ろつー。」

何だか嫌な予感がする。

まづ町に向かつて歩き出す。

以外と近くでシャドウウルフに会つたから、予想より早く森を出られた。

町を見ると、煙が上がつていて、叫び声が沢山聞こえてきた。

第10話 危機（前書き）

遅くなりましたすみません（――・；）

第10話 危機

「何が起きてるんだ・・・」

町から聞こえてくる悲鳴に呆然としてつぶやく。

隣でミルシアも畳然としている。

「うしても、どうしようも無い。」

何が起きているのか調べようと思いつきミルシアに声を掛ける。

「ミルシア、とつあえず町の中に入ろう!」

ミルシアを連れて町に入ると魔物が沢山いるのが見えた。

その魔物たちに人が襲われている。

何故、町に魔物がいるのか?何でこんなに沢山いるのか?

俺は余りの光景にそんな疑問も吹き飛び、近くの魔物に向かう。

「！」主人様！』

ミルシアの声がする。

「ついて来い！あと出来るだけ魔物は倒せ！」

俺は2本の剣を抜きながら叫ぶ。

近くにいたゴブリンを次々倒す。

通りを中心に向けて走り出す。

とりあえず、ギルドに行こうと思った。

後ろからミルシアもついてくる。

魔物が多過ぎる、何が起きているんだ。

魔物たちの中に突っ込み右の剣で、ゴリラみたいな魔物を切り、左では木みたいな魔物を切断する。

続けて、4、5匹倒す。

だが、キリがない！まだ周囲には魔物がいっぱいいる。

後ろからは強力なつむじ風が起きていた。

ミルシアかー助かった。

魔物たちが飛ばされる。

周りを見ると魔物の死体と一緒に人も沢山倒れている。

そんな光景から無理矢理目を離し先を急ぐ。

ギルドを目指しつつ何度も魔物を倒す。

途中で冒険者と思われる人が何人か魔物と戦っているのを見て、安心する。

町の中心に近づくに連れ魔物が増えてくる。

ギルドが視界に入った時、目に知っている人が入った、二一ナだ！ 知り合いが無事なのに安心して近付こうとすると、突然二一ナに飛び掛かる魔物の姿が目に入る。

くそつー！ からじや走つても間に合わない！

俺は咄嗟に右手を振りかぶり二一ナに飛び掛かっている魔物に向かつて剣を投げる。

剣は物凄い速さで飛んでいき、魔物の胴体を貫く。

魔物はそのまま倒れる。

俺は二一ナに駆け寄る。

「二一ナ！ 大丈夫か！？」

俺が声をかけると、突然顔を上げた。

俺の顔を見ると、突然泣き出した。

「・・・ハヤトさん、んんっ、こわかつたです」

そう言つて抱き着いてきた。

突然の事に焦る。

「もう、大丈夫だ！」

俺は二ーナを抱き寄せて言った。

しばらくそうしていたが、このままでは危ないし、ミルシアの視線が痛くなってきたからギルドに向かう。

ギルドには結構な人がいた。

誰かに話しへ聞いたと思いつく見渡すとミリシアさんが居た。

二ーナを抱える様にしてミリシアさんに近づく。

「ミリシアさん！何が起きているんですか！？」

「ああ、ハヤトさん！無事でしたか。私もよく分からぬのですが、魔物が沢山町に侵入してきたみたいですね」

シャドウウルフが近くに居たのもその影響なのだろう。

「今、ギルドの冒険者達はどうしているのですか？」

ミルシアが聞く。

「余り多くありません。依頼で町を出ている人が多いですから」

「それはまずいんじゃないのか！？」

「いえ、今近くに居た王都の兵が来て魔物と戦っているので町の魔物はそのつま全滅するでしょう」

それならひとまず安心か。

「俺達も助太刀に行くか！」

ミルシアに声を掛けた。

「そうですね」

「//コアさん、一ーナを頼みます」

ミコトさん//一ーナを渡してギルドから出る。

「君様、これを

そつ言つて俺が投げた剣を渡してくれる。

「おお、ありがとう」

外に出ると右手の方が騒がしかった。

「向こうに行くぞー！」

ミルシアに向つて走り出す。

少し行くと魔物が多くなつてくる。

更に魔物と戦う白い鎧姿が何人かいた、あれが王都の兵だろ？。

そこは、兵に任せて騒ぎの元へ急ぐ。

騒ぎの中心に着くとそこには、優に3メートルは超えるでかい人型の魔物がいた。

顔は醜く歪んでいて、手にはどこかの木をそのまま抜いたんじゃないかというほど大きい木が持たれていて、全身から物凄い威圧感を放つている。

その怪物の前には、赤いマントを纏つた、綺麗な金髪の少女がいた。

俺と同じくらいの年で、レイピアと魔法で奴を撹乱している。

だが、たいしたダメージは与えられてないみたいだ。

周りで呻いている鎧の兵は奴にやられたんだろうか。

ミルシアは魔物の威圧感に動けなくなっている。

その時、動きが鈍った少女に魔物が振り回す木が迫る。

俺は咄嗟に飛び出す。

「・・・あつ！」

ミルシアが何か言っているが気にしない。

両方の剣を抜きながら少女と怪物の間に割り込む。

迫つて来る木を剣をクロスにして防御する。

「くそっ…強い…」

耐え切れず少女と一緒に飛ばされる。

「ぐつー！」

「わやつー！」

俺は空中で体を捻つて着地する。

「おい！大丈夫か？」

後ろで倒れている少女に無事か確認する。

「ひひ、…あんたは？」

とつあえず無事だったから質問は無視して魔物に向かつ。

俺は剣を持ち直して魔物に向かつて走る。

魔物は俺に気づき持つている木を横から振る。

俺は跳んで避ける。

そのまま足元に潜り込み脛に剣を叩きこむ、血が吹き出しそうめぐ。

もう一度切らうとしたら背後から木が迫つてくる。

チツ！

舌打ちして横に避ける。

余りダメージを「えられていない。

また足を切ろうかと思つたが、時間が掛かり過ぎると考へ、首を狙う事にする。

魔物の攻撃を避けながらタイミングを計る。

魔物が木を横から振り回していく、タイミング良く木の上に飛び、木を踏み台にしてより高く跳ぶ。

「おひあああーーー！」

首に向かつて2本の剣を揃えて振る。

風圧で予想より飛び過ぎる。

強い衝撃が来る。

顔に剣がめり込んでいた。

「グギヤアアアアアーーーー！」

力を込めて振り抜こうとすると、剣が2本とも根元から折れる。

「えッ！？」

口から驚きの声を出しながら地面に向かって落ちてこく。

「まおじやますい。

「エレキショック
電撃」

後ろから声が聞こえると、すぐ横に光が走った。

光は魔物の顔に吸い込まれて、俺の剣が残っている傷口に命中する。

「ギヤアアアアー！」

魔物は叫び声を上げてゆっくり倒れる。

俺は先に地面に下りていたから巻き込まれない様に逃げる。

あの魔法は誰が？

分からぬこので、とりあえずミルシアの所に戻りつくると、田の前に立つ金髪の少女が立っていた。

第10話 危機（後書き）

感想お待ちしています。

これからもよろしくお願いします。

第1-1話 王女

「アンタ何者なの？」

目の前の金髪の少女はいきなり何者か聞いてきた。

異世界から来たと気づかれたか？

いやわざがにそれは無いだろ？と、自分で否定する。

「何者って、ただの冒険者のハヤトって言います」

とつあえず、無難な自己紹介をする。

すると、突然目の前が光ったと思つたら、地面から煙が出ている。

「うわー！」

驚いた。

さつきの魔物に止めをさしたのは彼女か！

「つて、急に何すんだ！」

当たつたら危ないだろ？

「ふざけないで。Aランクの冒険者パーティーでも倒すのが難しいオーガを、たつた1人で倒す人がただの冒険者の訳がないでしょう」

あのでかい魔物はオーガだつたのか。

「いや、1人つて、止めは君が刺したんだろう?」

「剣が壊れなければあのまま倒せたんじゃないの!」

ん~、多分倒せただろ?」

つて言うか剣、両方とも壊れてしまった。

また買わなきゃならぬのか。

「い、いや、たまたまですよ」

まずいな、怪しまれている。

「『』主様は、田舎から出てきたばかりで自分の凄さが分かつてないのです」

俺がどうしようか考えていると、ミルシアが助け舟を出してくれた。

「え?、アンタは何よ?」

「私はその方のメイドです

メ、メイドー?」

まあ、いいか、実際そんな感じだし。

そ、そう、『』こつは俺のメイドのミルシア

「…………本当なの？」

怪しまれてるよ。

「まあ、いいわ。改めてお礼を言ひておくわ。助けてくれてありがとう。あたしはアースファルト王国第一王女エルメナ・アースファルトよ」

えつー？

聞き間違いかな、王女って聞こえたみたいだな。声を失っている。

「お、王女？」

ミルシアも王女って聞こえたみたいだな。声を失っている。

こんな言葉使いの王女つているのか？

「えーと、王女様は何でこんな所にいらっしゃるのですか？」

とりあえず、慣れない敬語で話す。

「んつー！その話し方止めてくれる？さっきまでの話し方でいいから。そつこいつ堅苦しいの苦手なの。」

それでいいのか王女様……。

「あたしは、この町の近くいたときに町が魔物に襲われていいつて知られたから、あたしの部隊を率いて、魔物退治にきた訳よ」

「周りで倒れているやつとか、向こうで魔物と戦っているのは、エルメナ姫の率いる部隊のメンバーと言つ訳だな」

「ええ、そうよ。あたしのことばエルメナでいいわよ」

「いいのか？一応、王女だろ？」

でも本人に言われたら仕方がないな。

「分かつたよ、エルメナ。とりあえず近くに魔物は居そうにないから、ギルドに戻る」

「・・・本当に呼ぶなんて・・・」

俺が言つとエルメナが俯いて、何か言つているが聞こえない。

まだ呆然としているミルシアを正気に戻す。

「ミルシア、とりあえずギルドに戻るぞ！」

「はつー！王女様つて言つのはは？」

話しに着いて来てないのか。

「とつあえずギルドに行くぞ」

ギルドに向かいながらミルシアに事情を話してやる。

そういうや周りの兵達、置いてきてよかつたのかな？

ギルドに戻るとさつきより人が減っていた。

中に入つてミリアさんを探す。

「・・・いなーな」

見当たらなかつたから近くにいるギルドの職員っぽい人に今の状態を聞く。

「町に入つていた魔物は、王国の兵と冒険者のおかげで全て倒されました。今は、怪我人の治療と町の修復を急いでいます」

「ありがとう」

礼を言つと何処へ去つて行つた。

「もう、魔物達は全滅したみたいだな。」

「そうみたいね、もつと早く来れていたら良かつたんだけど

「いや、来てくれただけで十分だろ」

「そうです、こここの冒険者だけだつたらもつと時間が掛かつたはずです」

俺が否定するとミルシアも続いた。

俺はふと、疑問を投げかける。

「なあ、魔物つてこんな群れで町を襲つたりする物なのか？」

「いえ、私は聞いた事がありません」

ミルシアにも何故かは分からぬ様だ。

「多分、最近魔物が増えているのが原因じゃないかしら。あたし達も増えた魔物が町を襲わない様にこのあたりに来ていたのだし」

「じゃあ、他の町でもこんな事があつたのか？」

「いや、こんなに大規模なのは初めてよ。他は魔物が何匹か町に紛れこんだって感じよ」

「じゃあ、何で？」

「今回は、あのオーガに着いて他の魔物も町まで來たみたいね。オーガなんかの強い魔物は、自分の縄張りから滅多に出で来ないんだけどね」

エルメナは困った様に言つ。

「そういえば、魔物が最近増えてるって、どういふ事なんですか？」

「う、そこが問題だ。

「噂だけれど、神聖ミルバル国が異世界から勇者を呼んだらしいわ。

その影響らしいの、失敗したみたいだけれど

「へつー!？」

「はい?」

俺とミルシアから変な声が出た。

「どうしたの?」

エルメナが何事かと聞いてる。

その勇者って俺じゃね!?

異世界から呼んだとか言ってたし・・・・・いやつ一まだ断定するのは早い。

「そ、その召喚つていつ行われたか知ってる?」

「詳しいことは知らないけど、魔物が増え始めたのが1ヶ月前だからそのぐらいじゃないの?」

俺が来たのは4日前だから違うのか?

いや、エルメナも詳しいことは知らないって言ってるし、まだ分からないな。

「なあ、エルメナ、その事について何か分かつたら知らせて貰えな
いか?」

「一国の王女様がご主人様みたいな人の為にわざわざ動く訳がないでしょ?」

ミルシアに言われる。

分かつているが一応だよ、一応!

「いいわよ」

えつ!

「あたしもこの件には興味があったの。何か分かつたらアンタにも教えてあげるわ。アンタ達はまだこの町に居るんでしょう、何か分かつたらあたしの部下を遣わすわよ」

「本当か! ありがとうエルメナ。それからアンタっての止めてくれないか、ハヤトでいいぞ!」

「うつ、えーと、分かつたわよ・・・は、は、ハヤト

エルメナは顔を真っ赤にして言った。

か、かわいいな、この野郎!

「じ、じゃあ、あたしは部下を回収しないといけないから

心中で意味分からん事を言つてないとエルメナが去りうとしている。

「ああ、分かつた。いろいろありがとな。怪我しないようにじろよ

「！」

「お気をつけで」

俺とミルシアが言つと去つて行つた。

第1-1話 王女（後書き）

感想などがありましたら、どうぞお寄せください。

第1-2話 ミルシア（前書き）

アクセスPV 300 000 コード数 5 000 000 ! !
みなさんありがとうございます。

今回は途中でミルシア目線があります。

第1-2話 ミルシア

エルメナが去った後で何とか考えていると、声を掛けられた。

「あつ！ハヤトさんとミルシアさん」

ミロアさんが小走りで近寄つてくる。

「ああ、ちょうどよかった。二ーナは大丈夫ですか？」

「はい、今奥の部屋で休んで貰っています」

あんな事があつて、ショックを受けてなればいいな。

俺は、もう慣れてしまつたのかな？

何だから昔の自分に戻れない気がする、まあ、元の世界には戻る気は無いから、いいんだけど・・・。

「今から二ーナに会えたりします？」

「ええ、大丈夫ですよ。ちょうどハヤトさんに二ーナさんを送つてもらおうと思つていましたから」

ミロアさんはギルドの奥に入つて行く。

ギルドの奥には入つたことがなかつたけど、廊下の左右に部屋があつて、奥行きも結構あり思つていたより広い。

ミコアさんはその部屋の一つに入つて行く。

俺とミルシアも後から入る。

部屋は白いベッドが置いてあるだけの簡素な作りで、病院を思い出させた。

ベッドの一つに二ーナは腰掛けていた。

「二ーナさん、もう落ち着きましたか？」

ミコアさんが声を掛ける。

「ああ、ミコアさん、大丈夫ですよ。」

そう言つて二ーナを見て俺達に気づく。

「二ーナ、大丈夫だつたか？」

「あつ……は、ハヤトさん、大丈夫ですよ」

二ーナは顔を俯けて言つ。

「本当に大丈夫なのか？」

俯いているから大丈夫じゃないんじゃないか、と思い二ーナの顔を覗き込もうとする。

後頭部に衝撃が！

俺はしゃがもうとしていたから、耐え切れずに床にキスしてしまった。

「う、っ・・・何すんだ！！」

後ろを振り向くと、腕を振り下ろした恰好のミルシアがいた。

「今のは女心を理解していないご主人様が悪いです」

何だそりや？

「そうですよ、ハヤトさん。大丈夫と言つたら大丈夫なのです」

ミリアさんまで言つてくる。

完全に俺が悪者か・・・。

まあ大丈夫ならいいか。

「えつと・・・何かゴメンな、二ーナ」

「ええ、大丈夫ですよ」

あははは、と笑いながら言つ二ーナ。大丈夫ならいいか。

「二ーナさん、すぐ近くですけれどハヤトさん達に宿まで送つて貰おうと思つています」

「そんな、一人で帰れたのに」

「いやいや、俺達も二ーナの宿に泊まっているし、二ーナの事も心配だつたから」

「あ、ありがとうございます」

二ーナは顔を真っ赤にしていた。

そんなに真っ赤にされると俺も恥ずかしいんだけど。

一人でモジモジしていると、ミルシアが話しへ進める。

「二ーナさん、早く宿に戻りましょう」

「はい、ええ、行きましょう」

「やうだな、もう暗くなり始めてるし、早く帰った方がいいだろう」

ミリアさんは他の人にも用があると言つて他の部屋に行つた。

俺は、一人を連れてギルドを出る。

ギルドの前にある宿は、あんまり魔物の被害を受けていない様だ。

宿に入ると、シミルさんが二ーナに駆け寄つて来る。

「二ーナ！何処行つてたの、心配したんだよー！」

「『みんなさい。ハヤトさんに助けてもらつたの』

その言葉にシミルさんが俺の方を見る。

「迷惑をかけて済まないね」

そう言つて頭を下げる。

「いえ、とにかく無事でよかったです」

「今日の夜の飯は豪華だよ、町を歩ってくれた冒険者達に」
「走をつてな」

「それは、楽しみだな」

「私たちには」
「それで、二ノナ行くよー。」

二ノナはミルさんに引きずられて行つた。

夜の飯は本当に駆走でおいしかつた。

周りでは、冒険者達が祝いだ、と騒いでいた。

俺は、犠牲になつた人達のことを思い祝つ氣にはなれなかつたから、
早めに食堂を出た。

当然の様にミルシアも着いてくる。

部屋に戻りベッドに座つて、今日の事を考えてみると、ミルシアが
俺の前に座つて話しがありますと言つてきた。

私の家は貧乏だった。

エルフなのにエルフの村で暮らさないで、人間の町で暮らしていたからだ。

エルフだと言うだけで差別を受けた。

親がやっていた服屋も、エルフがやってる店だと買って貰ってくれる人は少なかつた。

私は20になる直前に奴隸商に売られた。

とうとう家が限界になつたのだ、弟や妹もいたし私は自分が奴隸なると言い奴隸になつた。

それまでは冒険者をしたりしたこともあつたけど魔法しか使えないし、一人ではたいした依頼は受けられないから家の足しになつていなかつた。

奴隸商では、腕輪を付けられて言つことを無理矢理聞かされた。

私は、毎日人間を恨んだ、私達エルフを差別した人間を。家族を恨んだ、無理に人間の町で暮らそうとした親を。何よりそんな運命を恨んだ。

私は、奴隸商の人々に反抗的だった。

そのせいか、なかなか売られなかつた。

売られないならその方が良いと思った。どうせ買われても慰み者として男に玩ばれるだけだから。

でもそんな願いも叶わない。

ある口ある部屋に連れていかれた。

「これは・・・」

私が入ると黒髪黒目の私より年下と思われる少年が座っていた。

私はこんな奴に買われるのか、と絶望した。

「いかがですか。なかなかでしょう。ちなみに処女ですよ」

「い、いへり何ですか？」

「ハヤト様には恩もありますし、一円セールでどうでしょう」「買いますーー！」

私が絶望しているといつの間にか買われる事になっていた。

「ありがとうございます。では契約をしますから立つて下さーー」

私は仕方なく少年に近く。

少年が私の腕輪に手を当てるとき奴隸商人が呪文を唱える。

私の体中を嫌な感覚がはしる。

「これで、ハヤト様が主人になります」

「奴隸を解放したい時は出来ます。また、奴隸には住む所と必要な食事を『える義務があります』」

奴隸商が説明している。

「えっと、俺はハヤト。これからようじへ」

少年が話し掛けてくる。

「・・・・・」

当然無視する。

「え〜、君の名前は?」

奴隸に慣れてないのか命令かどうか分からぬ言葉で聞いてくる。

「・・・それは命令ですか?」

「いや命令じゃないけど、教えて欲しいなと」

意味が分からない。

言わないとずっと待つてそうだったから答える。

「私はミルシアです」

少年について行へ。

「ミルシアって、魔法を使えるんだよね？」

「はい」

「何か武器ついて要るの？」

「ナイフ」

「防具は何か着けるの？」

「要らない」

「じゃあ、服は要るよね」

「要る」

質問には最低限の言葉で答える。

武器や服を貰って『えらぶ』。

ギルドにも登録したし、一応戦わすつもりみたいだ。よかつた魔物を倒す事で気分転換ができる。

「あー、もつねるか？」

宿に連れて行かれて夜になりギルドの説明を終えた少年が、私に言つてくれる。

そう言ひて自分のベッドに入つて寝よつとしている。

「何もしないの・・・?」

私は思わず聞いていた。

「えつ」

何を余計な事、言つてゐるんだろう。

「そりや、したいけビ。ミルシアが嫌そりだつたから

意味が分からぬ。

「なんで?」

私は混乱していた。

「えつ」

少年が何か言つてゐるが、無視してベッドに入つた。

少しすると、少年の寝息が聞こえてきた。

本当に何もしてこなかつた。

奴隸として売られる時から、自分の純潔を好きでもない奴に奪われる事を、覚悟していたのに。

あの少年が何を考えているのか分からぬ。

でも、私は安心してしまった。

いい人に買われたんだと思った。

私はちゃんと少年の奴隸らしくしようと思つた。

ご主人様が、自分は異世界から来たと言われた。

私は意味が分からなかつたけど、ご主人様のことを信じると決めていた。

奴隸の私に一人の人間として接してくれた、そんなご主人様だから。

町に戻ると町が魔物に襲われていた。

私は、ご主人様が走つて行くのに付いて行くだけで精一杯でした。

二ーナさんを助けて、騒ぎの中心に向かうと3メートルを遙かに超えるオーガがいました。

私は、見た瞬間思考が固まりました。

ご主人様がオーガの前に出て行く時も見てている事しかできなかつた。

「私はその時、『ご主人様が遠くに行つてしまつと思いました。私にはご主人様しかいません、その『ご主人様にまで置いて行かれるなんて……』」

ミルシアは悲しそうに言う。

「そんなことは無いよ。ミルシアは十分上手くやつてくれていろよ。戦闘以外でも助かってるし」

「『主じ、・・・ハヤト様』

ミルシアがやつとハヤト様と呼んでくれた。

俺はミルシアを抱き寄せる。

「これからもよろしく頼むな、ミルシア」

「私こそ、ハヤト様」

俺とミルシアはベッドに倒れ込む。

長い夜が始まった。

第1-2話 ミルシア（後書き）

「」感想お待ちしております。

第13話 魔剣

朝起きると隣にミルシアが寝ていた。

昨日はあの後何度も、『ほつほつ、結局、起きるのが遅くなつてしまつた。

窓を開けて換気をする。

「ふあー、いい天氣だな～」

さて、ミルシアを起さずとするか。

俺は、ミルシアの寝ているベッドに近づいて声を掛ける。

「お～いミルシア、朝だぞ～」

ん～、全く起きる気配なし。

ミルシアの肩に手を伸ばし、揺さぶる。

「ミルシア～、早く起きな～」

ん～、これでも起きないか、しょうがないから最後の手段といふか。

気持ち良さをひでてこるミルシアの顔の近くに、俺の顔を持つて行く。

そのまま近づいて・・・。

「ハヤト様、何をしているんですか？」

いい所でミルシアが目を覚ました。

あ、ハヤトって呼んでくれてるんだ、うれしいな。

「え~と、ミルシアがなかなか起きないから、目覚めのキスを、と思つて……」

「…………」

ミルシアが無言で見てくる。

嫌だつたのかな？

昨日の事はなかつた事になつてたりするのかー？

俺がショックを受けていると頬に柔らかい感触が・・・。

「ふえー?..」

変な声が出てしまつた。

俺がキヨトンとしている、ミルシアが恥ずかしくなつたのか真っ赤になつてゐる。

「わあ、早く『飯を食べ』に行きましょ~」

ミルシアは逃げる様に部屋から出て行く。

可愛いやつだな。

「ミルシア待てよーもう朝飯の時間は過ぎてるだ

俺は急いで後を追いかける。

朝飯は、外のどこの露店で買って食べることにした。

町はまだ昨日の傷跡が残っていたけど、店は結構やっていた。

露店もいくつか出ていた、その中の一つから焼いてくる肉の二
番に、誘われて近づいて行く。

「ミルシア、あれでいいか?」

露店を指しながら聞く。

「はい、いいですよ

俺は露店のおっちゃんに話し掛ける。

「すみません、これ二人分

「あいよー少々お待ち

そつ言つて、鉄板の上のお好み焼き?を皿に盛り付けてくれる。

「はい！お待ひびつ、10セールだよ

俺は10セールを渡してお好み焼き？を受け取る。

一つをミルシアに渡して食べてみると、広島風のお好み焼きみたいな感じだった。

「ん~、美味しい」

「はい、美味しいですね」

「そういえば、昨日の依頼の報酬をもらっていないな、今からでも貰えるのかな？」

「ん~、わかりませんね、とりあえずギルドに行つてみるべきですね」

俺達は食べ終わると、ギルドに向かう事にした。

そういえば俺の剣、両方共折れたんだな、また買わなきゃな。

ギルドに着くと昨日の人だかりは、すっかり無くなつて普段通りだつた。

中に入つて受付に向かつていると、横から声が聞こえてきた。

「ハヤトさん！」

声の方を見ると、ミリアさんが手を振っていた。

俺達はミコアさんの所に行く。

そこには、机と椅子が置いてある休憩スペースみたいな所だった。

「ちよつとよかつた、ハヤトさん貴方を探してたんですね」

「俺を？」

「ええ、昨日あの後エルメナ王女が貴方にこれを渡して欲しいと」

そう言つてミリアさんは、筒状の袋を渡していく。

「これですか？何だらう？」

何だか分からなゝまま袋を開けると、中から剣が一本出ってきた。

「これは…」

「あの時、壊れたのを気にしていたんでしうね」

一本の剣は片方は柄が青で、もう一方は柄が赤かった。

鞘には綺麗な装飾がされていた。

剣からは不思議と力が感じられた。

「なあミルシア、この剣つて・・・」

「はい、恐らく魔剣でしょう。赤い方は火、青は水だと思います」

「マジー魔剣って高いんじゃないの。」

「これない物を貰つていいのかな?」

「ハヤトさんは、王女を助けたのでしょうか、それくらい普通ですよ
俺が遠慮していると、ミコアさんが言つてくる。まあ、新しいのを
貰つつもりだったから、ありがたく貰つておこう。

「それから、ハヤトさんはギルドランクBになります」

「え!」

「え!」

ミルシアと被つた。

「何でもうBなんですか?まだ依頼も少ししか受けてないのに

「それは、昨日ハヤトさんがオーガを倒したと聞いた為です。オーガは相当強いのでBランクで問題無いと、判断しました」

「ああ、あのオーガか、たしかに強かった。」

「それから、オーガの討伐の報酬の10万セールです」

「「.....」」

驚き過ぎて声が出なかつた。

てか、俺この頃驚いてばっかりだ。

「じゅ、10万セールですか？」

「はい、オーガですから」

マジですか。

ミコアさんから10万セールを貰う。

「ランクBになりましたら、ダンジョンに入る事が出来ます」

「ダンジョンですか？」

「ええ、魔物が沢山いる洞窟などです。魔物が多いので、ランクC以下の冒険者には遠慮してもらっています」

「分かりました。また、行つてみたいと思います」

俺達は、貰つたお金の多さに呆然としながらギルドを出た。

第13話 魔剣（後書き）

感想待つてます。

第14話 平和（前書き）

40万PV達成！！
ありがとうございます。

ちょっと嬉しいので2週間ほど更新が余り出来ないかもしれません。

第14話 平和

ギルドで大金を貰った後、まだ昼だったけど昨日は大変だったから、ゆっくりする事にした。

さつき朝飯食つたばかりだけど、もう昼飯を食つ事にする。店を探しながら町をうろついていたら、5、6人の冒険者達が歩いていた。

「新しく見つかったダンジョンに行こうぜー。」

「ええ、この人数なら大丈夫でしょう」

「ダンジョンでがっぽり儲けよ!」

彼らは、ダンジョンに行くみたいだ。

俺も明日行つてみるかなと、思つて見てると、彼らの中にスンを見つめた。小さいから気づかなかつた。

仲間と上手いことやつてるみたいだな。絡まれていたから心配してたけど、大丈夫そうだな。

「ハヤト様、どうしましたか?」

俺が立ち止まっていたらミルシアが不思議そうに聞いてくる。

「いや、何でもないよ」

俺はスンから田を離して歩き出す。

「そうだ、昼は何食べる？思つてもいなかつた収入があつたから少々高くてもいいぞ」

「いえ、これと言つて食べたい物は無いですが、高い店なら町の奥に有ります」

「なら、そこに行つてみようか？」

「そうしましょ！」

歩いているとミルシアに男から視線が送られて来る。止める！ミルシアは俺のものだぞ。もう渡さないからな。

ミルシアは視線を氣にして無いのかスタスタ歩いて行く。

俺は周りの男達を睨みつけてミルシアを追う。

町の奥には、高そうな店や、大きな家が多くつた。

ミルシアは、レンガ作りで、綺麗ないかにも高級そうな店の前で止まつた。

「ソレなんかどうでしょ？」

別に嫌な理由もなかつたから頷いた。

中は広い割にテーブルは少なかつた。

ウェイトレスに案内されてテーブルに座る。

適当にコースを頼むと、ウェイトレスは下がった。

「明日、ダンジョンに行きたいんだけどいいか?」

「ええ、せっかくBランクになつたのですから行きましょう

「そういや、さつき新しいダンジョンが見つかつた、とか言つてゐのを聞いたけど、ダンジョンって結局の所何なんだ?」

「ダンジョンですか?・・・そうですね、魔物が沢山いる洞窟や森ですかね」

「洞窟や森に沢山魔物が居たらダンジョンになるの?」

「いえ、正確にはダンジョンには一体の強力な主が居ます。主を中心弱い魔物が沢山集まつて、ダンジョンになるのです」

「主つてのは、どれくらい強いの?」

「そうですね・・・最低でもオーガくらいかと、大抵は十人単位で挑みますから、ドラゴンとかですね」

「最低でもオーガか・・・」

話をしていると、料理が運ばれて來た。

料理はフランス料理みたいな感じだった。

高いだけあって美味しかった。ミルシアも幸せそうに食べている。

食べ終わると、大金が入った事だし、ミルシアの武器でも買つか、といつ事になつて武器屋に向かつた。

元々ミルシアは遠慮してナイフだけでいいと言つていたけど、魔法使いは、杖を持つてゐるそうだ。

杖は中に埋め込まれた宝石の効果で、魔法の威力を上げたりできるみたいだ。

武器屋の中には、前来た時に居たドワーフのオッサンがいた。

「オッサン、また来たよ！」

「ん？ あんたは確か・・・双剣を買ったやつか

「覚えていてくれたんだ」

「ああ、双剣なんて珍しい物を買つたんだ、忘れないわ」

やつぱり珍しいのか・・・。

「ん？ 今日は女連れか？」

「そりゃ、今日は彼女の武器を買いに来たんだ」

「そりゃ、客なら大歓迎だ。で、武器はなんだ」

「私は魔法使いなので杖をお願いします」

「ほう、杖か。今ちょうど良いのが入ったばかりだ。ちょっと値が張るが大丈夫か?」

「ああ、いいぜ」

オッサンは奥に引っ込んだと思ったら、すぐに戻つて來た。

手には、細い杖が握られている。

俺は杖と聞いて、仙人とかが持つてそうな長くてゴツいのを考えていたんだが、○リー・ポ○ターの杖みたいな、細くて短い杖だった。

持ち手の先には、綺麗な縁の宝石が埋まっていた。エメラルドだろうか?

「これには、翠玉が使われていて、特に風、嵐の威力を強める効果がある」

やつぱりエメラルドだ。

「風に嵐ならちょうど良いじゃん。ミルシアどうだ?」

「ええ、大きさも小さくて扱い易いですし、良いです」

「よし!で、いくらだ?」

「一万セールだ」

「買つた！！」

お金を払つて店を出る。

ダンジョンに行くなら、野宿の準備も必要だと呟つかり、野宿道具を買いに行く。

テントや食料など野宿に必要な物を買う。

野宿に必要な物を揃えると、結構な荷物になつた。

「なあミルシア、こんなにいろいろ必要だつたのか？」

「もちろんです。荷物はハヤト様が持つてくれますよね？」

笑顔で言われる。

何だかミルシアの俺の扱いが酷くなつてる。

まあ、持つけどね。あんな笑顔を向けられたら断れない。

ミルシアの武器や食事を合わせると今日は一万一千六百セール使つた。

夕方まで町をぶらぶらして、宿に戻るとニーナがいた。

「ハヤトさん、ミルシアさん、昨日はありがとうございました」

「いえ、ニーナはもう大丈夫なの？」

「はい、もう大丈夫です。宿も余り被害を受けてなかつたので安心しました」

「それは、よかつた」

二ーナと別れて、夜ご飯を食べて、明日に備えて早めに寝た。

第1-4話 平和（後書き）

ご感想お待ちしております。

第15話 ダンジョンに行ひつー（前書き）

何とか更新（^-^；

まだ忙しいので次がいつになるか未定です、何とか早く更新できる
様に頑張りますので、ご勘弁下さい。

第1-5話 ダンジョンに行くつい

朝ご飯を食べてこると、二ーナを見かけたから声を掛ける。

「ハヤトさん、どうしたんですか？」

二ーナが近くに来て聞いてきた。

「俺達今日からダンジョンに行くから、何日か宿に床つて来ないと
思つけど、よろしく！」

「もうダンジョンに行ける様になつたんですか！？」

「ああ、もうヨロシクになつたんだ！」

「それはおめでとうございますー待つてこますから、無事に帰つて
来て下さいね」

恥ずかしそうに微笑んで言ひて、行つてしまつ。可愛にな。

俺はギルシアとダンジョンの詳しい事を聞く為に、ギルドに向かつ。
いつもの様にギコアさんの所に、と思つて受付を見るとギコアさんはいなかつた。

俺は若干寂しくなり、トボトボ受付に向かつ。

「ハヤト様みつともないのでシャキッとして下さい」

ミルシアに後ろから罵倒される。うつー俺の扱いが段々酷くなってる。

とつあえず、中年のおばさんのいる受付に行く。

「すみません、新しいダンジョンについて教えてもらえますか?」

「はい、ダンジョンですか?失礼ですが、ギルドランクを確認させて貰つても良いですか?」

俺はポケットに入っていたギルドカードを取り出して渡す。

「はい、Bランクですね大丈夫です。それで、新しいダンジョンについてですか?」

俺は頷く。

そういうミルシアって、こういう時静かにしているよな。ミルシアには喋らないか、俺に暴言を吐くの両極端しかないのか?

「新しいダンジョンはここから一歩ぐらいの所にあります」

意味の無い俺の考えを無視して話しさは進んでいく。

「ダンジョンには洞窟や森などが有りますが、新しく見つかったのは洞窟で、今の所ほとんど攻略されていません。魔物の多さからして相当強い主が居ると思われます」

「洞窟つてどれくらいの大きさなんだ?」

「ハツキリとは分かりませんが、恐らく主の居る一番奥まで普通に歩いて、一日は掛かると思います」

「どうか、普通に歩いて一日か……。

「えつーー一日ーー?」

「やう、一曰です」

「一日って事は洞窟の中で野宿するのー? 危なくないのか?」

「あー、ダンジョンと言つても所構わず魔物が居る訳ではないので、魔物がほとんど居ない所もあるみたいですね」

「そう言つ事か。そりいえばダンジョンに行つて何をしたら良いんだ?」

「ダンジョンの魔物は特殊で、倒すと魔石を残し消えます。その魔石を持って帰つて来て下さい。ギルドの方で買い取らせてもらいます。もちろん一番の目的は主を倒す事ですから、主を倒すと莫大な報酬が出ます」

魔石を残して消えるって、まあゲームらしいな。

「魔石? ダンジョンの魔物は他の魔物と違うのか?」

「いえ元は同じです。私達にも詳しくは分からぬのですが、ダンジョンに居る魔物は倒すと、魔石を落として消えるみたいです」

「分かつた。とにかく魔物を狩りながら主の所を目指せばいいん

だな？」

「その通りです」

「ありがとう。ミルシア行こうつか

「はい、行きましょ！」

町を出るとダンジョンのある方向に歩いて行く。

草原の中を歩いていると、ゴブリンの小さい群を見つけた。

俺が魔剣の威力を試そうとすると、ミルシアが先に魔法を発動させていた。ミルシアも杖の威力を試したかったのか！先を越された。

ミルシアからゴブリンに向かつて、小さい竜巻みたいなのが突き進んで行く。ゴブリン達は巻き込まれ吹き飛んでいく。すぐに全滅した。

「・・・すげえ！」

「・・・」

ミルシアも驚いているのか目を見開いている。

「なあ、俺も魔剣を試したいから次魔物が現れたら俺にやらせて

「・・・あ、はい分かりました」

「で、どうなんだ？俺はその魔法の元の威力を知らないから分から
ないんだけど」

「ええ、風の魔法だつたのですが、嵐の魔法並の威力が出ていまし
た」

「それは凄いな！嵐の魔法を使った時が怖いな」

草原を歩き続けていると今度はシャドウルフが何匹か見つかった。

俺は左側に吊している赤い柄の剣を右手で抜き、右の青い剣を左手
で抜く。一本の剣を構えてシャドウルフに向かつて走り出す。

一番近くにいる奴に右の剣で切り付ける。

ズバッ！…！

普通に斬れた。・・・・・あれつ？魔剣じゃないの？何も起きなかつたよ。もしかして、あの王女に騙された…？

訳が分からぬから、左の剣でも斬つてみる。

ズバッ！…！

さつきと変わらん…！何なんだ意味が分からぬぞ…！

「ハヤト様、多分魔力を込めないと発動しないのかもしれません」

俺が混乱していると、ミルシアが教えてくれた。

あつ、魔力か。魔力を込めるつと、了解了解・・・・・つて、どうするんだよ！？

「魔力を込めるつてどうしたら良いんだ？」

俺は残っている魔物を警戒しながらミルシアに聞く。

「え～と、体の中にある力を集めて剣に注ぎ込む感じです」

え～、体にある力を集めるつと、よく分からないけどやつてみると、それを剣に注ぎ込むつと。

すると右の剣は炎を立上がり、左の剣は水を纏っている。

「おお！出来た！すげえ！！」

興奮してはしゃいでいると、シャドウウルフが迫つて来る。

俺は右の炎を纏つている剣で切り付ける。シャドウウルフは斬られると、すぐに炎に包まれて燃える。

後に迫つて来るのは、シャドウウルフを左の水を纏つている剣で切り付ける。ほとんど斬つた感覚がなく斬れる。血もほとんど出ない。

シャドウウルフを全滅させても俺は返り血を浴びていなかった。

「うひや凄いな」

俺はその威力と、使い勝手の良さに感動していた。

その後も何度も魔物を倒し、ダンジョンに着いた時にはいつも口が落ちていた。

「もう、暗くなつたし今日は外で野宿にするか

「はい、ちょうどあちらに良い開けた場所が有りました

「じゃあそこに行こう。」

そこで野宿する事にした。

俺は今まで背負っていたかいリュックを下ろす。中からテントを出して張る。

テントなんて張つた事がなかつたから手間取つて、ミルシアに馬鹿にされながら張つた。

木の枝を集めて来て焚火をする。

食事は持つてきた保存食を焚火で温めて食べた。意外と美味しくて驚いた。

見張りを交代でする事にする。ミルシアからする事になつたから俺はテントに入つて横になつた。

第1-5話 タンジニアニアヒー（後書き）

「意見、感想お待ちしております。」

今、ここで返事は遅くなってしまいます。

スミマセン。ヨシナリ。

第1-6話 ダンジョン探索（前書き）

更新出来ました。

いつの間にか、ユニーク数が10万を超えてました。
感謝です。

第16話 ダンジョン探索

「ハヤト様、起きて下さー」

ミルシアに起こされる。もう交代の時間が、早いな。全然寝た気がしない。

「ふあー、了解交代だな」

俺は欠伸をしながら起き上がり、ミルシアと見張りを交代する。

ミルシアはすぐに寝たみたいだ。寝息が聞こえてくる。見張りって言つても何もする事がない。ハツキリ言つて暇だな。

そういう『世界』に来てからもう一週間ぐらいか?いや、まだかな?よく覚えてないな。

こつけでは、毎日の内容が濃すぎて、もう一ヶ月は居る気がしてくるから不思議だな。

でも、地球の何のないダラダラした生活が懐かしいな。でもこっちに来れてよかつたのかな、俺にとつたら。あのままあつちの世界でいたら碌な大人に成らなかつただろうし。今の生活は大変だけど、満足してるしな。

気が付くと、いつの間にか朝になっていた。

ヤバッ、寝てた！急いで周りを見るとミルシアが気持ち良さそうに寝ていた。

よかつた。何もなかつたみたいだな。それに寝ていたことも気付かれてなさそうだな。

俺はホッとしてミルシアを起こしに行く。

「ミルシア、朝だぞ。起きないとキスを「必要ありませんー」それ、そうか……」

そんなに嫌だつたのか。へこむな。

飯を食つてすぐ元、ダンジョンに向かつ。

ダンジョンの入口は特にどうして事はない普通の洞窟みたいな感じだった。

「なあミルシア」で良いんだよな？めりやくめりや普通の洞窟だけど

不安になつて聞く。

「ええ、ダンジョンも元は普通の洞窟なので仕方がないのでしょう

中は意外と広く、5人くらい並べる幅に天井も結構高い。

暗いのを予想していたけど、案外明るくて壁や天井が薄く光つている。

進んでいくと、すぐに別れ道が現れる。

やつぱり中は入り組んだりしているのかな？迷いそうだな。

「なあ、どうに行へ？」

「どうしましょ、私もどうすれば良いか分からせん」

「ん~、あれだ。ずっと同じ壁を突っで行くとかは？」

「そうですね、悪くはあります。ただ、時間が掛かるでしょうが

「まあ、それしかないからじょうがないだろ」

右の壁を伝って行く事にして、右に進んで行く。

すぐそこ、別れ道にたどり着く。

やはり右に進む。

別れ道に着く。

右に進む。

別れ道。

右。

別れ……。

「つて、魔物はざつしたーダンジョンには沢山居るさじやなーのかー！」

思わず叫んでしまった。

何でこんなに何も出ないんだ？ダンジョンじゃないのか、と心配になるだろ？

「静かにして下さー！多分、他の冒険者が先に倒しているんでしょー」

ミルシアに睨また。ス、スリマセン。

「やうなのか？その割に他の冒険者に会わないけど」

「ここのダンジョンが結構広いのじゅー。たまたま私達と同じルートを進んでる人でも居るのでしょー」

「でも、今からルートを変えると迷うな。まあ楽だし、そのまま行くか」

「やうですね」

その後も右側に沿つて歩き続けると、前から猿みたいな魔物が出て来る。

「ミルシア、やつと戦たれー！」

「来ます。気を付けて下さー」

「えつ！」

猿を見ると、杖の様な物を持っていた。

「キヤキヤキヤキヤー！」

猿が奇声を発すると、杖の先に火の玉が現れる。

「キー！」

杖が振られると人の頭ほどの火の玉が飛んで来る。

「クツ！」

油断していた。まさか魔法とは。

避けきれないと思った瞬間、突然目の前に水の玉が現れ、火の玉と衝突する。

水が蒸発するような音が聞こえ、辺りが水蒸気で覆われる。

「ハヤト様！大丈夫ですか？」

「ミルシア、ありがとう助かつた」

俺は左の剣を抜き、水蒸気の中に突っ込む。

魔力を剣に込めると剣は火を纏う。魔物がいた所に切り込む。

確かに手応えがあり、魔物が火に覆われる。

火が消えると魔石が残つた。魔石は綺麗な緑色だった。

魔石を回収してミルシアの所に行く。

「焦つた、魔法を使える魔物がいたのか！」

「ええ、私も知りませんでした」

ミルシアも知らなかつたのか。魔法を使えるのは珍しいのかな？

次は先手を打たれない様に注意しよう。

その後も、右沿いに進んで行く。魔物は何体か出て来たけど、みんな単体ですぐに倒せた。

「疲れてきたな」

「そうですね。もう結構な時間が経っていると思います」

ダンジョンの中にいると時間の経過が分からなくなるな。

「そろそろ、何処かで休もうぜ」

「ええ、休める場所を探しましょ」

探すつて言つても、あまり魔物がないから何処でも変わらない気がするけど。

少し進むと開けた所に出た。

「よ～し、ここで休もう。」

俺とミルシアは座つて、持つてきた食べ物を食べる。

俺は集めた魔石を取り出す。

魔石の色は様々で、緑や青、赤、黄色などを拾つた。
どうやら、魔物によつて色が変わるみたいだ。

「なあ、ミルシア。主つて何処にいるんだら?」

「私に聞かないで下さい。私も知りたいです」

「ん~、やうだよな。じゃあ『ギヤヤヤヤヤーー』えつ何だ?」

突然洞窟の先から悲鳴が聞こえた。

第1-6話 タンジニア探索（後編）

感想などお待ちしております。

第17話 ネルミー(前編)

遅くなりました。

短いですが(- - -)

第17話 ネコ!!!

俺達は悲鳴がした方に急いで向かう。

それにして、ダンジョンに入つて初めて他人の存在を感じたのが悲鳴とは、さすがダンジョンといつところだな。

少し行くと前から数人の人が必死の形相で走つて來た。

「おい！ いつたい何があつたんだ？」

俺は状況が知りたくて聞く。

「あつーーー、ドーラゴンだ、主のドーラゴンが出たんだ！」

「俺達じゅとしても敵わない！」

俺の声を聞いて初めて俺達に気付いたみたいで、安心しながら話してくれた。

「主か、ミルシア意外と早く見つかつたみたいだぞ」

「ええ、そうですね。行きますか？」

「おーーー、さっそく行こーーー！」

「やめときなよ、ドーラゴンだよ」

「おー、あんたら2人で行くのか

俺達が主に挑みに行こうとしたら、さつきの人たちに呼び止められる。

「んつ、ミルシア、ドリゴンってどれぐらい強いんだ?」

「オーガよりは強いですね」

「まじか~、まあ大丈夫だろ」

俺達はドリゴンの待つ所に向かう。

「お、おい」

何か言つていたが無視する。

「きやあああああああー」

ドリゴンの所に向かつて走つていると、また悲鳴が聞こえてきた。

「何だ! あいつ等意外にもいたのか、急ぐぞー!」

スピードを上げて走るとすぐに開けた場所に出る。

中にはデカイ魔物がいた。あれがドリゴンか!

ド、ドリゴン?

「どう見てもドラゴンと並ぶより恐竜なんだけど……。

もつと、この羽の生えているのだと思つていただけど。

少しドラゴン見るの楽しみにしてたんだけどな。

俺がひそかにショックを受けていると、ドラゴンの前に立つまつている人が目に入つてくる。

ドラゴンはその人を踏みつぶそうとしていた。

「くわー・ミルシア、援護頼む！」

「分つてます」

俺はドラゴンの横つ腹にタックルをきます。

ドラゴンはバランスを崩してつづくまつてる人を踏めずに距離をとる。

俺はうづくまつてる人の横にしゃがむ。

「おー！大丈夫か？」

その人は女の子で猫耳が付いていた。

「ス、スン？」

どう見てもスンだった。

「ハヤト様！」

ミルシアの声を聞くと、俺はとつせにスンを抱き上げその場から飛退く。

俺がいた場所にドリゴンのじつぱがものすごい速さで振られる。

とりあえずスンを端に寝かしてドリゴンに向かう。

俺は左右の剣を抜く。

すぐに魔力を込めると炎と水を纏う。

ドリゴンはミルシアの魔法に翻弄されている。

俺は突っ込んで行つて、首にむけて両手の剣をそろふる。

「おひあー。」

気合を入れて、力任せにたたき付ける。

炎と水が迸る。

「グギヤー！」

ドリゴンの頭が落ちる。

「ふへつ？」

思つていたよりも簡単に倒せてしまった。

「さすがはハヤト様ですね」

ミルシアが呆れた様に見ていた。

俺はスンの所に向かう。

「スン！大丈夫か？」

「んつ、んつ…」

俺が呼び掛けるとスンがゆっくりと目を開ける。

俺を認めると、驚いた様に目を見開く。

「おー、大丈夫か？」

「ふえつ…な、なんで、ハヤトさんが…？」

混乱しているスンはすぐかわいかつた。

「いや、たまたま一緒にダンジョンに来てたら、悲鳴が聞こえたから

「そなんですか…あれ、そいえばドリゴンは…」

「ああ、俺達が倒しておいた。そこに倒れているだろ

「ふえつ…本当だ！」

スンは驚いて、田を見開いている。

「それはそうと、スンはどうしたんだ？まさか一人で来たのか？」

「ううう、……他にもいたんだけど、どこに行つたんだろう？ハ

ハハッ」

スンは悲しそうに言つた。

「もしかして、さつきの逃げてきた奴らか？」

「そうかも。あたしはいつの間にか逸れてたから……」

スンは今にも泣きそうな表情だった。

もしかして、他の奴らに置いて行かれたのか？逃げるためのおどりにされたのか？

「どうが、これからどうするんだ？」

「えつと、何もないけど……」

「じゃあ、俺達と一緒に行こぜー！」

「えつ、良いんですか？」

スンが心配そうに言つた。

「ええ、もちろんですよ

ミルシアが頷いて、俺のほうを見てくる。俺は頷く。

「そうだ、大丈夫だ。行こうぜ！」

第17話 ネーム（後書き）

ご感想お待ちしております。

第1-8話 町へ（前書き）

今年最後の更新。
短いです、すみません。

第18話 町へ

俺達は、ドラゴンの魔石を回収して（魔石は真っ赤だった）、スンも連れて、出口に向かった。

一度通つた道だったから来た時よりも早く外に出れた。

「もう、真っ暗です……」

スンが少し不安そうに囁く。

「そうだな、ここで野宿しよう。ミルシア、野宿の準備をしよう。あつ、スンは休んでいいぞ」

俺はスンを気遣かって言う。

「ぜ、全然疲れてませんし、手伝いますよ！」

スンが焦った様に言った。

「や、そうか。じゃあスンも野宿の準備を手伝ってくれ」

俺はどうしたのかと、思ったけど、スンは普通に準備を手伝つているから、何なのかは分からなかつた。

野宿の準備が出来ると、「飯を食べる。スンは食べ物は他の人が持つていたらしく、持つていなかつたから俺達のを分けた。

スンは申し訳なさそうにしてたけど、遠慮しなくていいのに。

ご飯を食べ終わるともひつ寝る事になり、順番に見張りをする事になった。

俺はスンは休んでいていいと言ったのに、また自分もやると言つて
いたから三人で順番になつた。スン、大丈夫なのかな？

ミルシア、俺、スンの順番になつた。

俺とスンはミルシアに見張りを任せて眠る。

俺が横になつていると、スンの寝息が聞こえて來た。

よかつた。ちゃんと眠れてるみたいだ。

俺の意識も闇に落ちた。

「ハヤト様、時間ですよ」

「ふあ～、……了解」

俺は隣で寝ているスンを起こさない様にして、ミルシアと交代する。

見張りをしながらスンの顔を眺める。

スンは多分仲間に見捨てられた、と思っているだろうな。実際そ
なんだけど……、まあ、あいつらも自分の事でいっぱいいっぱいだ
つたのだろう。

スンがショックを受けてなかつたら良いんだけどな。

そういえば、スンはこの前冒険者になつたばかりだと黙つてたな、俺みたいなチートじゃないと、もうBランクになつてる訳がないのに……、何でダンジョンに居たんだろう？

ん~、また聞いてみよう。

特に何も起きないまま時間になつた。

俺は、スンを起こしに行く。

「お~い、スン時間だぞ」

スンの肩を揺さぶつながら声を掛けるけど、なかなか起きない。

スンの可愛くてあどけない寝顔を見ていると、抱きしめたくなつてきた。

いやつ、待て俺。畢まるな。ここで抱きしめてしまつたら何か大切な物を失つや。

駄目だ、可愛い過ぎる。

俺がスンを抱きしめようと身をスンの上に乗り出した時、スンが突然目をパチッと開いた。

「な、何？」

スンが状況が分からず混乱している。

「…………」

俺は突然の事に固まってしまった。

「…………？」

「あつ、」「交代の時間だから起こそうとしていたんだ。スンがなかなか起きないから、困っていたんだよ」

俺は急いでスンの上から身体を除けながらまくし立てる。

「そ、そりなんですか?……すみません」

スンの疑わしげな視線が突き刺さる。

「い、いや大丈夫だ。起きてくれたから。じゃあ見張り頼む」

俺は逃げる様に横になつた。

朝日に起じされて、朝飯を食べる。

「スンは町に戻つたらどうするんだ?」

「まだ、何も決めてないです」

「そういうや、ギルドランクは何なんだ?」

「え~と、まだ口です」

「口なんですか？何でダンジョンに？」

「え、え……」

「他のやつに連れて来られたんだね~」

「え~あ、そうです」

「なあ、もし良かつたら俺達とパーティーを組まないか？」

「良いんですね？」

「全然大丈夫だぞ、な、ミルシア」

「ええ、ハヤト様がいいなり」

「ほ、本当ですか？ありがとうござります」

スンは嬉しそうに微笑み。

俺たちは街に向かつ。

町に着くと、スンに聞く。

「スンは何か取つて来た物はあるか？」

「はい、ダンジョンで倒した魔物の魔石はあたしが持つていたから、

それが

「じゃあ、換金して行こうぜ」

俺達は、ギルドに向かつ。

ギルドに入るところの様にコアさんの所に行く。

「すみません、魔石を持っできました」

俺とスンは魔石を出す。

「いらっしゃりですね、少々調べておきますので明日また来てください」

「分りました。また来ます」

俺達はギルドを出る。

「スンはここに住んでるのか?」

「いえ、宿に泊まっています

「じゃあ、明日また朝ここで」

「分りました」

「また、明日」

俺とミルシアはスンと分れて宿に向かつた。

第18話 町へ（後書き）

感想お待ちしております。

みなさんよいお年を。

第19話 スン（前書き）

遅くなりましたが、新年明けましておめでとうございます。

今年もよろしくお願いします。

第19話 スン

「ふあ～」

俺はギルドに向かいながら欠伸をしていた。

「……ハヤト様はいつも欠伸をしていますね」

ミルシアが呆れた様な視線を送つてくる。

「そ、そつかな？それは意識してなかつたな……」

「ちゃんと頭が働いてるんですか？」

「ぐつ、だ、大丈夫だと思つ……」

「そつなんですか～？」

俺はミルシアから疑いの籠つた目を向けられた。

まあ俺は基本あんまり考えずに直感で行動する人だから、ミルシアの言つ事を完全に否定することはできない。

俺達はギルドに着くとスンを探す。

「あつ～ござました。んつ、あれは？」

ミルシアの声にミルシアの見ている方を見ると、スンがいた。

スンは何人かの冒険者と揉めている様な感じだつた。

近づいていくと話し声が聞こえてくる。

「だから、俺達が倒した魔物の魔石は何処にあるのか聞いてるんだ！」

「そ、それはギルドに換金を頼んでいるから、受け取つたら山分けにしたら……」

「ハハハ。こいつ何言つてんだ。そんな約束本氣にしていたのかよ

「お前はただの荷物持ちと画だよ。お前みたいな無能誰が必要とすんだよ！？」

「元々お前には分けねえつもりだつたし」

冒険者達の言葉に、スンは泣きそうになつていた。

俺はスンの事には口を出さないでこよつと思つっていたけど、余りの言つようにこれ以上見ていふ事は出来なくなつて割り込む。

「よつ、スン。待たせたか？」

スンは俺の声を聞いて、俯いていた顔を上げる。

「ハ、ハヤトさん！？」

「あつ、お前は何だ？」

「あつーお、おこ「イツは……」

一人が俺の事に気が付いた様子で他のやつらに耳打ちしている。

「なんであんたらが「イツ」と？」

一人が聞いてくる。

「俺達はスンとパーティーを組んだんだ」

「あんたら」「事はあのドリ「ンを倒したんだろう？…その実力なら「イツは邪魔にしかならないだ」

「それに「イツは俺らを騙して「魔石を独り占めする様な奴だや」

「おこおこ、お前らが騙してスンにただ働きさせよつとして、しないには見捨てて逃げ出したんだろ？？」

俺が指摘すると冒険者達は悔しそうに歯を噛んでいる。

「それに俺はスンを必要としている」

俺はスンの頭に手を置きながら言つ。

「へやつ、覚えてるよー。いつか金を取り返してやるからなー！」

ドリ「ンを倒した俺達には敵わないと想つたのか、捨て台詞を残して去つて行く冒険者達。

「よかつたなスン。あこいらの事は気にしなくていいからな。金も

貰つとけ

「うん。ね、ねえ、あたしが必要つてどうじつなの？」

スンが恐る恐る聞いてきた。

「えつーー、それは…………」

思つてもいなかつた事を聞かれ、俺は狼狽する。

「…………やはり必要じゃないですよね…………」

「必要と言つたのは嘘だつたのですか、最低ですね」

一人の言葉に何か理由を言わないとけないと思い口を開く。

「あ、あれだ、荷物持ちとか?」

「あの人達と同じですか…………」

「最低ですね。やっぱ理由はないんですね」

俺は全身から汗が吹き出でくるのを感じた。

くわつ、もうやけだ。

「そう、あれだ、スンはネコミミでかわいいだつ。そう、俺にはスンのかわいさが必要なんだ！」

勢いで言つてしまい顔が熱くなるのを感じた。

「ふえつ……」

「……身体田当てですか、本当に最低ですね」

スンは顔を真っ赤にして俯く。

ミルシアは軽蔑した目で睨んできた。

「もういいだろー受付に行こうぜ」

俺は逃げる様に言つて受付に向かう。

いつもの如くミコアさんの所に向かう。

「何か揉めていたみたいですが、大丈夫でしたか？」

「ああ、一応は」

「あの人達はしつこい事で有名ですから、気を付けて下さい」

あいつらしつこいのか、スンが狙われるかも知れないな。気を付けよ。

「ありがとう、昨日の魔石はどうだった？」

俺が聞くとミリアさんは奥に行つて、魔石を持って來た。

「まずハヤト様ですね。これは新しいダンジョンの主ですね」

そう言つて真っ赤な魔石を取り出した。

「主の討伐ありがとうございました。これでのダンジョンもじき無くなるでしょう」

「いえいえ、倒せたのはたまたまですか」

「この魔石は15万セールです。他に千セールの魔石が13個、主を倒したので10万セールで、合計26万3千セールです」

俺がお金を受け取るとミコアさんはスンの魔石を取り出す。

「スン様は千セールの魔石が48個の4万8千セールです」

スンもお金を受け取りギルドを出る。

「なあスン、あいつらに襲われるかも知れないから、俺らと同じ所に泊まらないか?」

「えー良いんですか?」

「ああ、良いよなミルシア」

「ええ、大丈夫ですよ

「と言つ事だ」

「すみません。お願いします」

俺達はスンの泊まっていた宿に行つて、スンの荷物を取つて、俺達

の宿に行つた。

受付にいた二一ナに話し掛ける。

「二一ナ。また一人増えるけど良いか?」

「はい、大丈夫ですよ。部屋は同じでいいですか?それにしてもハヤトさんはモテモテですね」

「そういうのじゃないよ。部屋は同じでいいよ。ありがとう」

俺達は部屋に向かつ。

ベッドは一つしかないから毛布を貰つてきて、俺が床で寝る事にした。

ミルシアもスンも自分が床でいいと言つていたけど、俺が床だと押し切つた。

スンは緊張しているのか余り喋らなかつたけど、ベッドに横になるとすぐに寝ていた。

俺もすぐに眠つた。

第19話 スン（後書き）

ご感想お待ちしております。

第20話 スン(2)

俺が起きるとスンは既に起きていた。

「おはよー、スン」

「あー、おはようございますハヤトさん

俺はスンの話し方に違和感を感じた。

「なあ、そんな丁寧な喋り方しなくても、前会った時みたいに碎けた喋り方でいいぞ。というか、そうしてくれるとうれしい」

「えっと、分かったの。こんな感じでいいかな?」

「おー、ありがとウ

俺達はミルシアを起こして、朝ごはんを食べに行く。

食堂に入り食事を頼み、席に座る。

「これからだけど、王都からの知らせが来るまでは、ダンジョンとか依頼を適当にこなしたいんだがいいか?」

俺はこれから予定を確認する。

「私はもういるんですけど」

「……王都からの知らせ?」

ミルシアはいつものように即答だが、スンは話しの内容が掴めず混乱している。

「そうだ、スンは知らないんだつた。とある事情で王都の知り合いで調べて貰っている事があるんだ。その知らせの事だ」

まさか、その知り合いが王女だとは思わないだろうな。まあ、あえて言う事もないだろう。

「そうなんだ、あたしはそれでいいよ。あたしも役に立てる様になりたいから、それまで鍛えたいの」

スンもいいと言っているから、今後の予定は決まった。

スンは役に立たないと言つてゐるけど、実際どれくらいの実力なんだろ？

朝ごはんを食べ終わると、俺達はギルドに行く。

ギルドに着くと早速、依頼書を見に行く。

スンはDランクって言つてたな。パーティーだからその三つ上のランクまでだな。なら……。

「ミルシア、スン、Bランクぐらいの依頼を受けようと思つ。何かよき気な討伐の依頼を探してくれ

「分かりました」

「分かったの」

ミルシアとスンは、返事をするとすぐ『依頼書を見て回つて』。俺も依頼書を眺める。

えーと、Bランクは、っと、あんまり多くないな。

あるいは大体討伐系か。

その中からよれやけのを見てみる。

『森の魔物の退治』

『シャドウバード討伐』

「ハヤト様、これなんかはどうでしょ?」

「ハヤトさんこれはどう?」

一人も見つけて来たみたいだ。

『ナキスネークの討伐』

『ビクビーの討伐』

いろいろあるな。名前だけでは分かる様な分からない様な感じだな。

「ん~、この、『森の魔物の退治』にしそう。これなら色んな魔物と戦えるだろ? うしいだろ?」

「Bランクだからたいして強い魔物も出ないでしょ。つから、多分大丈夫だと思います」

「了解なの」

ミルシアとスンもいいみたいだし、これにしよう。

俺は依頼書を持って受付のミコアさんの所に持つて行く。

「これをお願いします」

「ハヤトさん、毎日毎日ダンジョンに依頼に頑張りますね。他の冒険者は月に三、四回しか依頼を受けない人もいるんですよ」

ミコアさんは依頼書を確認しながら話しつけてきた。

「そうなんですか？でも今俺は他にやる事もないですし、新しいパーティーメンバーの力を試すつもりなんです」

「でも、健康には気をつけて下さいね」

「そういうえば、また新しいダンジョンとかの情報ないですか？」

「ダンジョンの情報ですか？えへ、今の所はないですね」

やつぱりさすがにまだ無いか。

「そうですか、分かりました」

「また何か情報が入つたら知らせますね。それで依頼の説明をさせてもらいます」

「お願いします」

「「I」の依頼はこの町から南に5、6時間の所にあるノーマス村の村長からの依頼です」

「えっ！ノーマス村！」

「どうしたスン、知ってるのか？」

スンが急に声を出すから驚いて聞く。

「あ、あたしの実家があるところなの」

「そうなのか？」

「そうなの」

「それはちょうど良かつたです、場所は分かりますよね」

ミコアさんがホッとした様に言う。

「ノーマス村って場所がわかりにくかったりするのか？」

「そうなの」

「場所が分からなかつたって、帰つて来る冒険者も結構いたりするんです」

スンに続いてミコアさんが補足してくれた。

「ふうん、そんなに分かりにくいのか」

「依頼内容の詳しい事はノーマス村の村長に聞いて下せ」

「分かりました」

ミコトさんに見送られてギルドから出る。

「わうだ、スンは何か必要な武器とかないのか?」

「ふえ、武器ですか? ん~おもと見に行つていいですか?」

「ああ、いいぞ」

俺達は武器屋に行く」と立てる。

武器屋に入ると前来た時にいたドワーフのおっさんがいた。

「いそに」むかはへ

「いらっしゃい、また来たのか?」

「ああ、今度はこの子の武器を探しに

「どんな武器がいいんだ?」

おっさんがスンに聞く。

「ん~、短剣ですかね」

「短剣か、短…剣…なら…これなんかどうだ？」

おっさんは奥の方で「んんん」と思つたら、短剣をいくつか出してくる。

スンは短剣を持ち上げたり軽く振つたりしている。

「どんな感じだ？」

「これがいいの」

そう言つてスンは一つの短剣を持ち上げる。

「それは3000セールだ」

「これを買います」

おっさんが値段を叫びつと、スンは叫びつとこにしたみたいだ。

スンがお金を払つと俺達は店を出る。

第20話 スン(2) (後書き)

"J感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1558y/>

ハーレム目指して何が悪い

2012年1月13日21時20分発行